

医師・一般市民の
医薬品および医療に関する意識調査
概要

平成 12 年 3 月

(レ ー ダ ー)

日本 R A D - A R 協議会

目次

医師の医薬品および医療情報に関する意識

. 調査の概要	1
. 回答者の属性	2
. 医師向け調査のポイント	4
. 調査の要約	5
A 医薬品情報の入手状況	5
B 医薬品の情報提供	10
C 医薬品に関するコミュニケーション	15
D コンプライアンス	17
E 医薬品の副作用	19
F 医薬分業	23
G 情報の開示	25
H その他	28

一般市民の健康、医療および医薬品に関する意識

. 調査の概要	31
. 回答者の属性	32
. 一般市民向け調査のポイント	34
. 調査の要約	35
A 健康に関する意識	35
B 医師や病院に関する意識	38
C くすりの説明と理解	40
D くすりの情報収集（入手）	44
E くすりの服用	49
F くすりの副作用に関する意識	51
G 医薬分業	53
H 医療に関する情報開示	55
I その他	57

医師と一般市民の意識の対比

「医師と一般市民の意識」の対比について	59
A 医薬品に関する情報.....	60
B 医薬品の情報提供.....	61
C 医薬品に関するコミュニケーション.....	61
D コンプライアンス.....	62
F 医薬分業.....	63
G 情報の開示.....	63
H その他.....	65

医師の医薬品および医療情報に関する意識

(概要)

．調査の概要

調査の目的

医薬品、医療を取り巻く環境が大きく変わってきている中、医師などの医療提供者と患者・医療消費者とのコミュニケーションがますます重要になってきている。しかしながら、いまだ医療提供者と患者・医療消費者とのコミュニケーションは充分とは言い難く、今後の促進が強く望まれている。そこで本調査は、医療および医薬品に関して医師がどのような意識を持っているかを探るために企画実施された。

調査方法

- ・日本 R A D - A R 協議会加盟各社の医薬情報担当者により調査票を配布、郵送による回収

(一部は医薬情報担当者により回収)

調査対象

- ・全国の医師 6,400 人

調査期間

- ・1999 年 11 月～2000 年 1 月

配布数・回収率

- ・配布数：6,400
- ・回収数：2,293
- ・回収率：35.8%

調査分析機関

- ・株式会社日本能率協会総合研究所

利用にあたっての留意点

- 1．数値に関しては原則として小数第 1 位を四捨五入して整数で表示した。ただし、0.5% 未満の数値については小数第 2 位を四捨五入して小数第 1 位まで表示した。
- 2．単位未満の数は四捨五入しているため、内容と個々の計が合わないことがある。
- 3．単数回答においては、設問以外の回答を省略したため 100% 未満のことがある。
- 4．複数回答においては数値の合計は 100% を超えることがある。
- 5．母数については各図表において“ n ”で表示してある。

. 回答者の属性

属性	実数(人)	構成比	参考(注)
<u>1. 性別</u>			
男性	2092	91.2%	86.1%
女性	191	8.3%	13.9%
無回答	10	0.4%	
<u>2. 年齢</u>			
20代	125	5.5%	11.3%
30代	594	25.9%	27.9%
40代	819	35.7%	25.1%
50代	388	16.9%	13.4%
60代以上	357	15.6%	22.3%
無回答	10	0.4%	
<u>3. 業務種</u>			
開業医	1007	43.9%	64.3%
勤務医	1259	54.9%	35.7%
無回答	27	1.2%	
<u>3-1. 勤務先</u>			
大学病院	273	21.7%	
官・公立病院	459	36.5%	
個人病院	302	24.0%	
診療所	57	4.5%	
その他	136	10.8%	
無回答	32	2.5%	

属 性	実数(人)	構成比	参考(注)
-----	-------	-----	-------

4. 診療科目

内科	1410	61.5%
小児科	360	15.7%
精神科	60	2.6%
外科	297	13.0%
産婦人科	68	3.0%
眼科	47	2.0%
耳鼻咽喉科	97	4.2%
皮膚泌尿器科	157	6.8%
その他	337	14.7%
無回答	10	0.4%

5. 主たる従業地

北海道	224	9.8%	7.2%
宮城県	79	3.4%	2.9%
埼玉県	163	7.1%	5.2%
千葉県	167	7.3%	5.3%
東京都	287	12.5%	20.8%
神奈川県	287	12.5%	9.0%
長野県	113	4.9%	2.5%
愛知県	178	7.8%	8.0%
京都府	28	1.2%	4.5%
大阪府	239	10.4%	13.1%
兵庫県	114	5.0%	6.9%
広島県	102	4.4%	4.2%
愛媛県	129	5.6%	2.2%
福岡県	165	7.2%	8.3%
その他	7	0.3%	
無回答	11	0.5%	

注) 出典：平成10年度「医師・歯科医師・薬剤師調査」

・ 医師向け調査のポイント

医師向け調査は、合計 50 問（内副問 15 問）の設問を A～H までの 8 つの項目に分類して集計・分析を行った。

項目 A では、医師が医薬品についてどのような情報をどのような方法で入手しているかを中心に調査を行い、最近急速に発展しつつある電子情報の活用度合や関心度合も併せて調査の対象とした。

項目 B では、医師が患者に対して医薬品の情報をどのような方法でどんな内容に重点を置いて説明しているか、それに対する患者の反応はどうか、また障害者に対する対応状況についても実態の把握を行った。

項目 C では、医師が日常の薬物療法を行う中で、患者とのコミュニケーションをどのような形でとっているかを中心にまとめた。

項目 D では、患者の服薬状況について、医師がどの様に日頃感じているかを調査した。

項目 E では、医薬品の副作用について、患者に知らせている度合、副作用が起きる要因、副作用の説明をしたときの患者の反応、副作用発生時の対応状況等を調査した。

項目 F は、医薬分業への取組み実態について、**項目 G** は、情報の開示状況について、難病の告知や、カルテの開示問題等、具体的な質問を行った。

項目 H は、項目 A～G の分類には入らない医薬品に関連する事項や、最近話題となっている生活改善薬や未承認薬の問題を取り上げた。

分析・集計結果は、副問や属性別分析を含めると膨大な量となるので、この「調査概要」は、それぞれの設問の答えのグランドトータルを中心に分析しコメントを加えた。

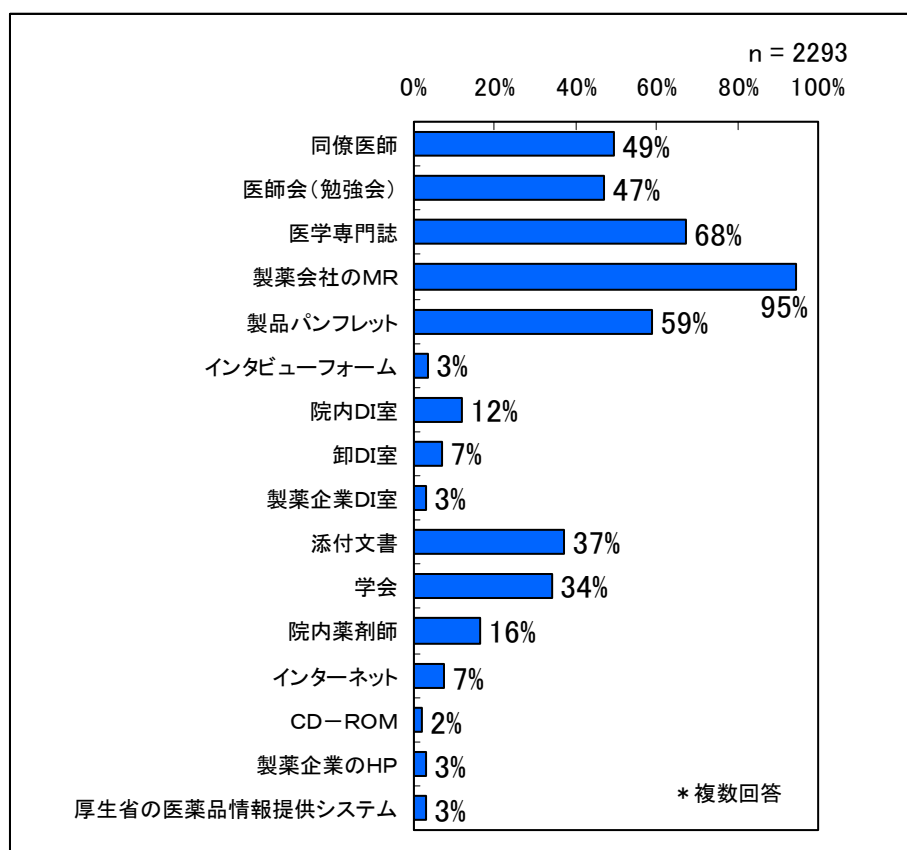
なお、副問の中の主要なものや、属性別（年代、診療科、勤務医、開業医等）にみて特徴的な結果がみられるものについては、コメント欄で付記すると同時に 88 年度調査と対比可能なものについては、 を付して注記したので参考にさせていただきたい。

調査の要約

A 医薬品情報の入手状況

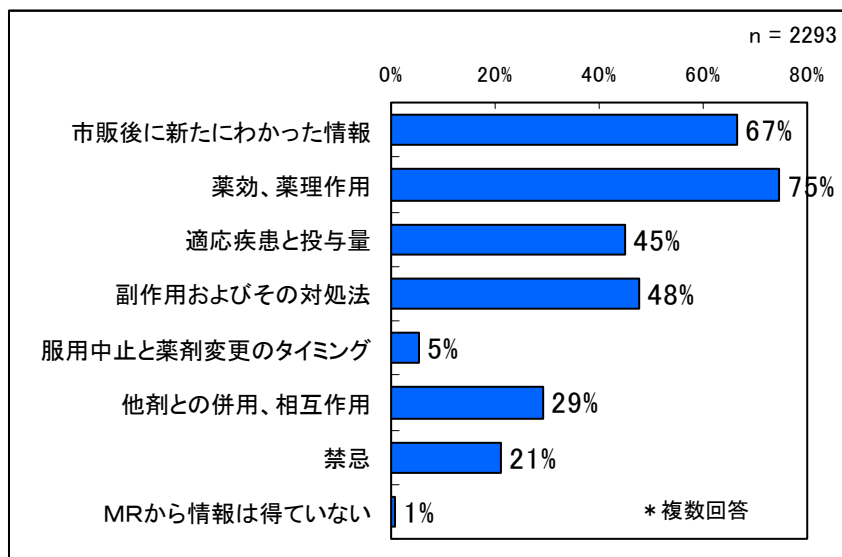
1. 医薬品情報の入手先：MRがトップ
2. MRから得る情報の内容：「薬効、薬理作用」、「市販後に新たにわかった情報」が多い
3. 添付文書：95%が読んでいる
4. 医者から貰った薬がわかる本：78%がよいことと思っている
5. 企業のホームページ：将来利用するつもりが過半数
6. 添付文書情報や副作用情報の開示：89%がよいことと思っている
7. 日本RAD-AR協議会のホームページ：将来利用するつもりが77%

1. 医薬品に関する情報はどこから入手していますか。(いくつでも お付け下さい)



医薬品の情報の入手先としては「MR」が95%、「医学専門誌」が68%、「製品パンフレット」が59%。ただ、「同僚医師」からの情報の入手は20代(79%)、30代(61%)で多く、「医師会(勉強会)」は50代(57%)、60代以上(71%)が多い。

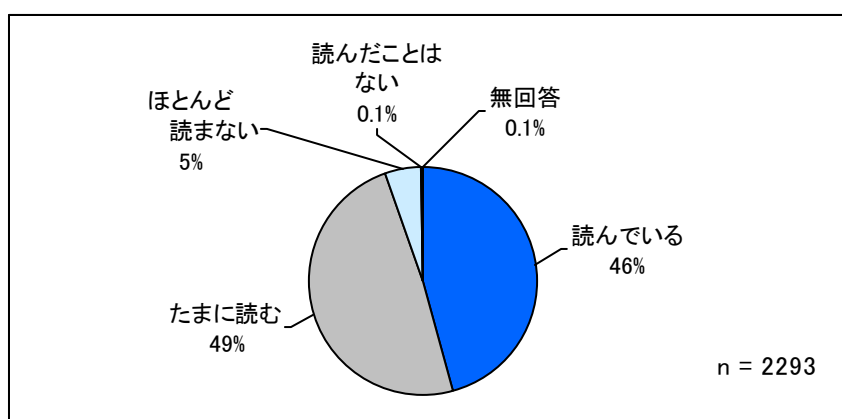
2. 製薬会社のMRからどのような種類の医薬品情報を得ていますか。(3つ以内でお付け下さい)



MRから得る情報では最も多いのは「薬効、薬理作用」で75%、また「市販後に新たにわかった情報」も67%。

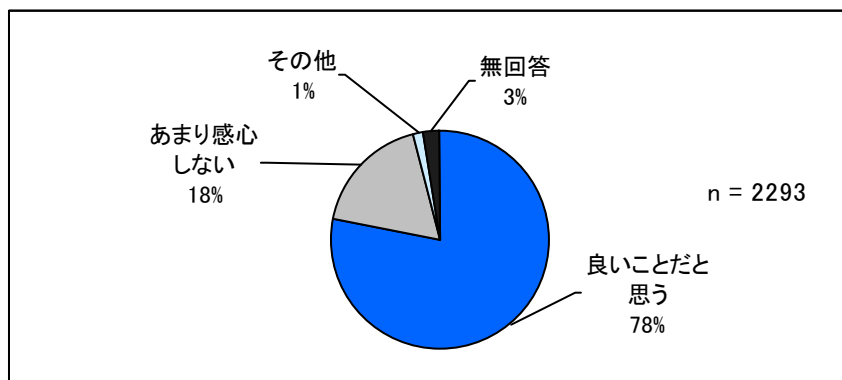
* 88年調査では「薬効、薬理」(73%)「適応疾患と投与量」(60%)「市販後に新たにわかった情報」(42%)の順である。

3. 処方される医薬品の添付文書(特に使用上の注意)はご覧になっていますか。

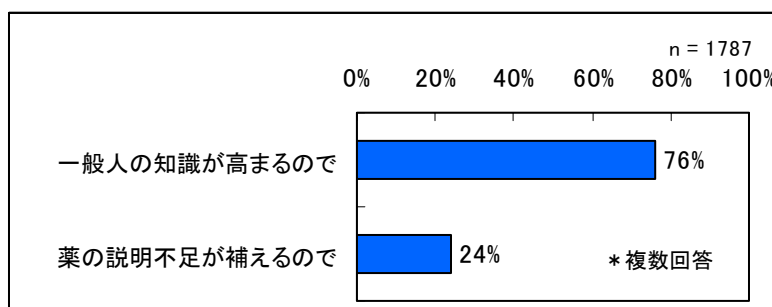


「読んでいる」医師が46%、「たまに読む」医師が49%。「読んでいる」は、20代では19%、60代以上では77%と年齢につれて多くなる。

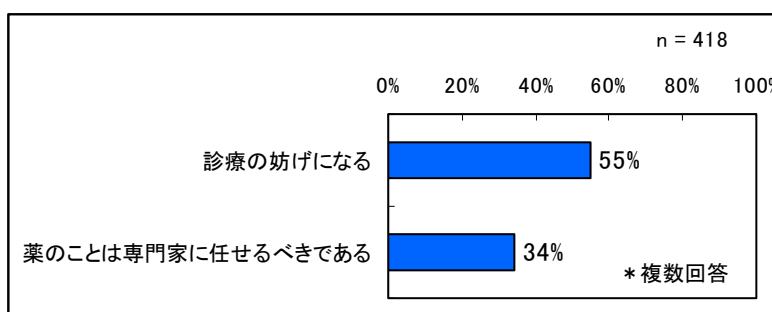
4. いわゆる「医者から貰った薬がわかる本」がよく売っていますが、そのことについてどのようにお考えですか。



良いことだと思う理由



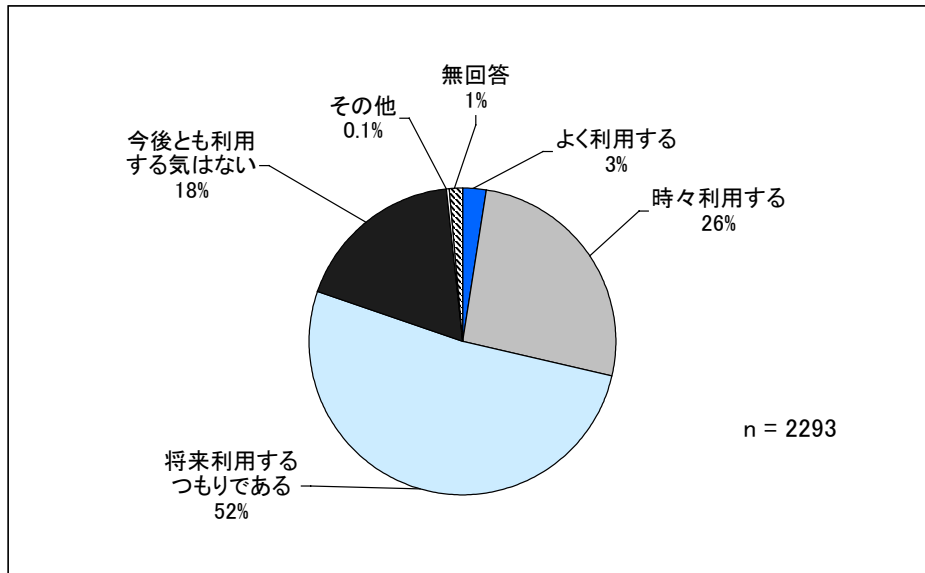
あまり感心しない理由



「良いことだと思う」が78%で医師は肯定的である。良いことだと思う理由は「一般人の知識が高まる」が76%となっている。あまり感心しない理由は「診療の妨げになる」が55%で、20代、30代の医師で比較的高い。

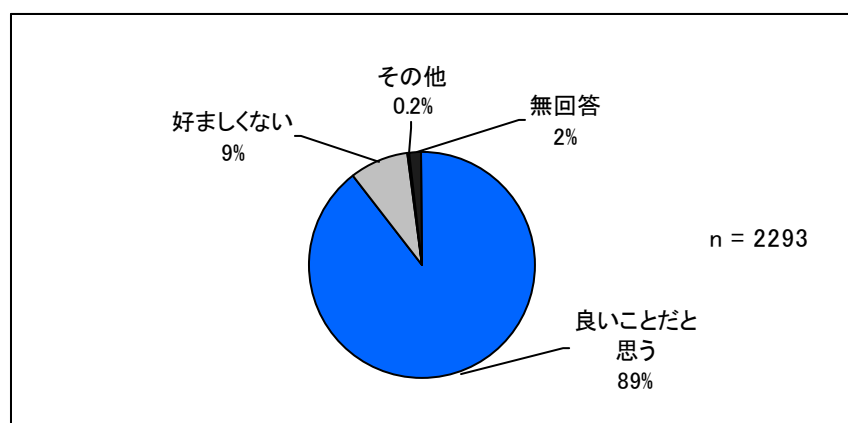
*88年調査では肯定的評価が38%で否定的評価が37%であった。今回の調査では78%の医師が肯定的であり、意識が大きく変わっている。

5. 企業のホームページを利用することがありますか。



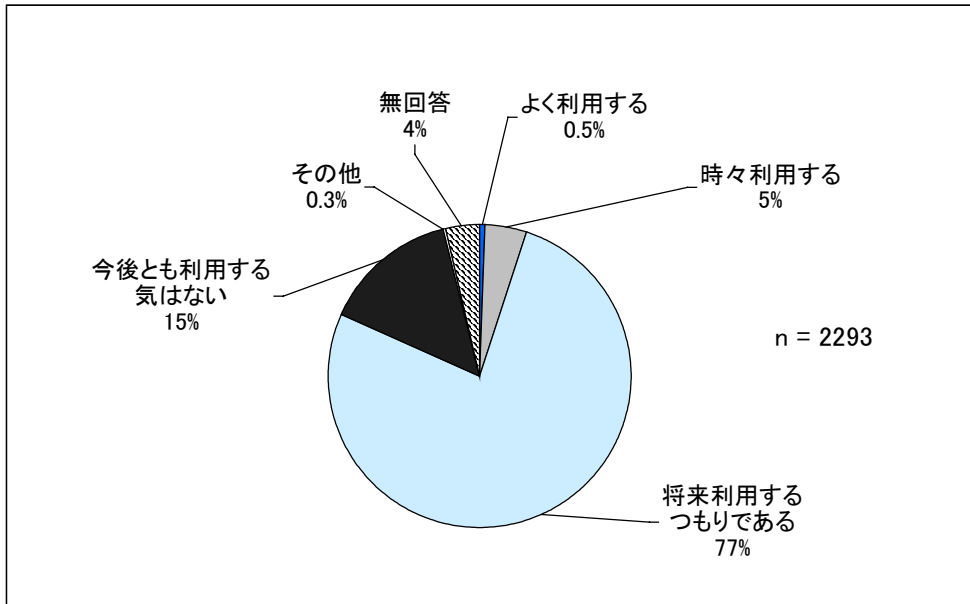
「よく利用する」が3%、「時々利用する」が26%、「将来利用するつもりである」が52%。利用している医師（「よく利用する」+「時々利用する」）は30代で35%と多く、60代以上では19%と少ない。

6. 1999年5月厚生省の医薬品情報提供システムにより、医療用医薬品の添付文書情報や副作用情報が一般に開示されることになりましたが、どのようにお考えですか。



89%の医師が良いことと思っている。

7 .日本RAD - AR協議会ホームページの「くすりのしおり」を利用することがありますか。

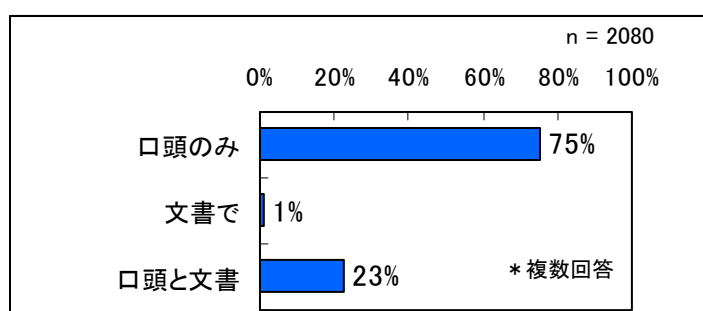
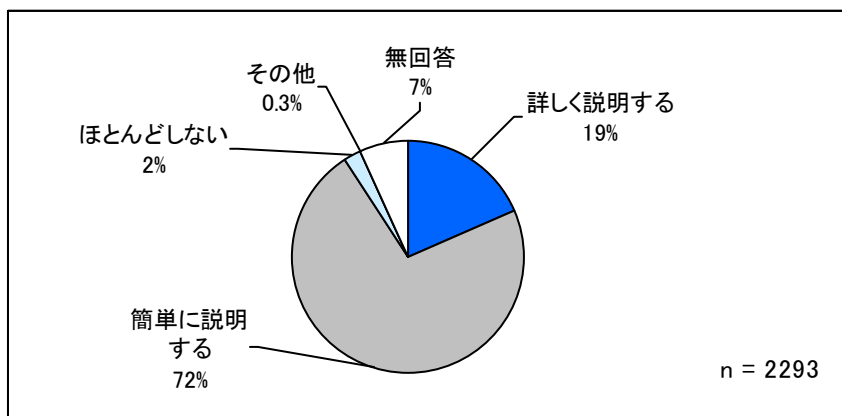


現在利用している医師は5.5%であるが、「将来利用するつもり」との回答が77%となっている。

B 医薬品の情報提供

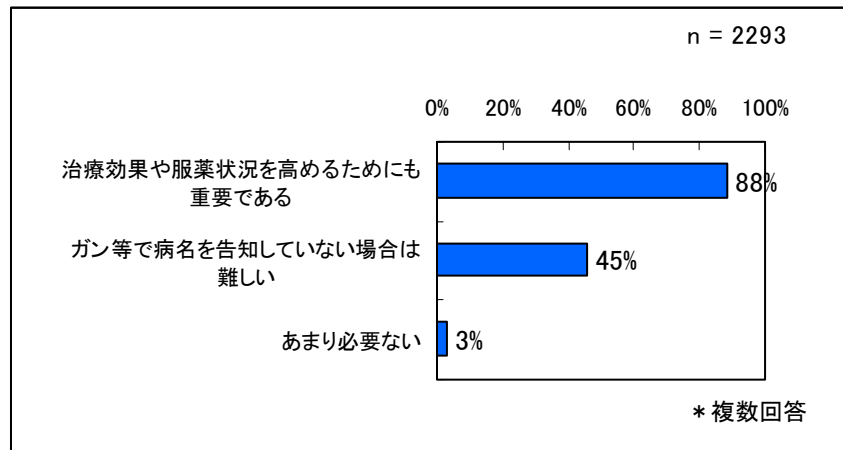
1. 患者へ説明：72%が簡単に説明
方法：75%は口頭のみ
2. 医薬品情報の提供：治療効果や服薬状況を高めるために重要が圧倒的
3. 説明時間：1～5分が62%
4. 文書での提供：渡しているのは12%
5. 情報提供された患者の反応：多くの患者では変化がある
6. 米国のような処方薬の宣伝：否定的な意見が多い
7. 障害者への情報提供：40%がしている
8. 薬剤師の病棟活動：91%が必要

1. 医薬品を投与する時、薬効や副作用などについて患者に説明しますか。



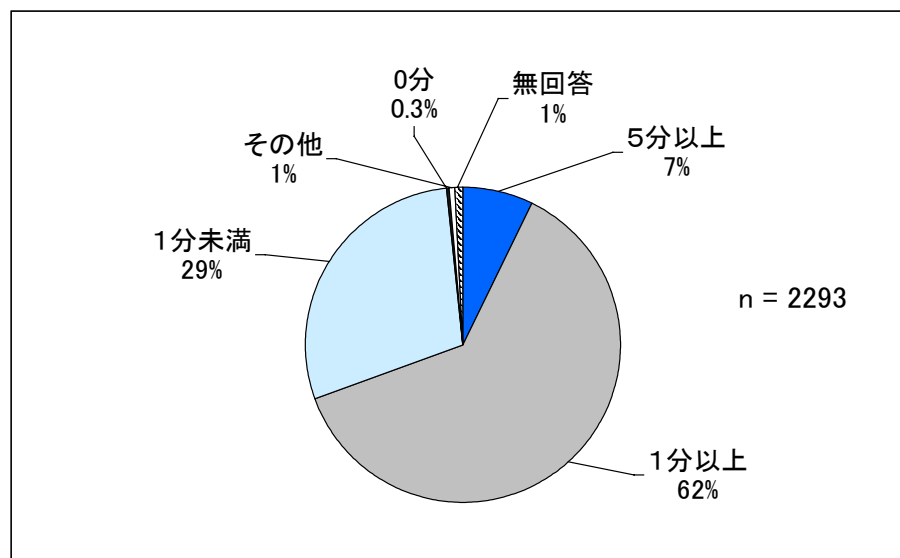
「詳しく説明する」が19%、「簡単に説明する」が72%であり、ほとんどの医師が何らかの説明をしている。「口頭のみ」の説明が75%、口頭と文書の両方で説明する医師が23%である。また精神科では詳しく説明する医師が40%と高い。

2. 患者さんへの医薬品情報提供については、どのようにお考えですか。(いくつでもお付け下さい)



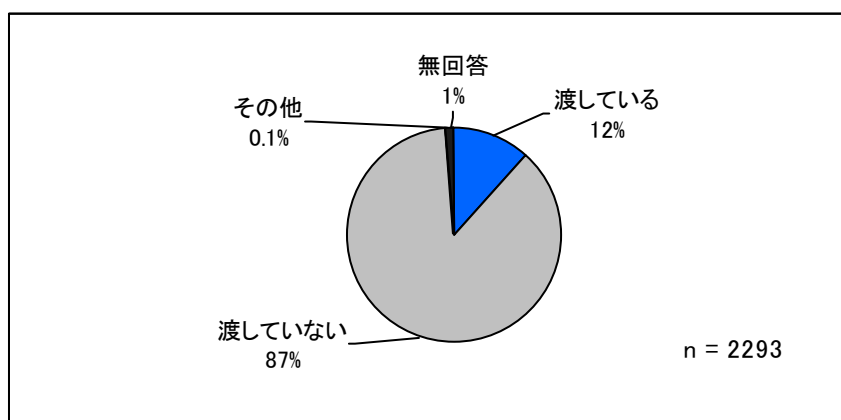
「治療効果や服薬状況を高めるために重要」が88%、「ガン等で病名を告知していない場合は難しい」が45%で、「あまり必要ない」は3%にすぎなかった。「ガン等で病名を告知していない場合は難しい」との回答は20代が高く(66%)、60代以上では低い(37%)。

3. 患者さんへの医薬品について説明する時間は、平均どれくらいですか。



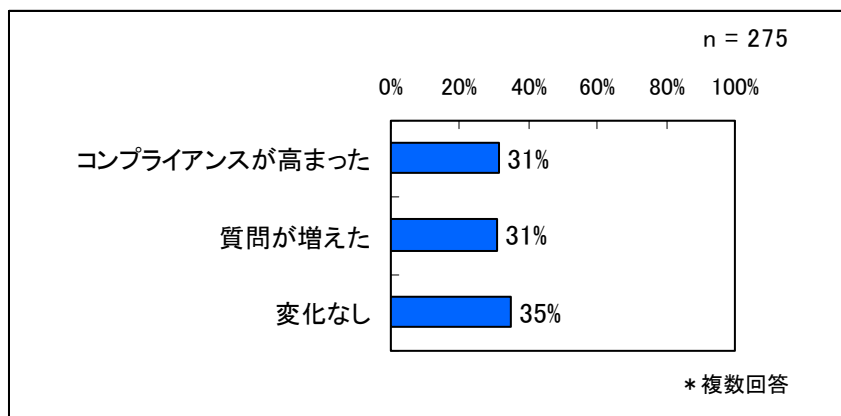
「1～5分」が62%であった。「5分以上」は全体では7%だが、精神科では20%と比較的高い。

4. 患者さんへの医薬品の文書情報は先生ご自身で渡していますか。



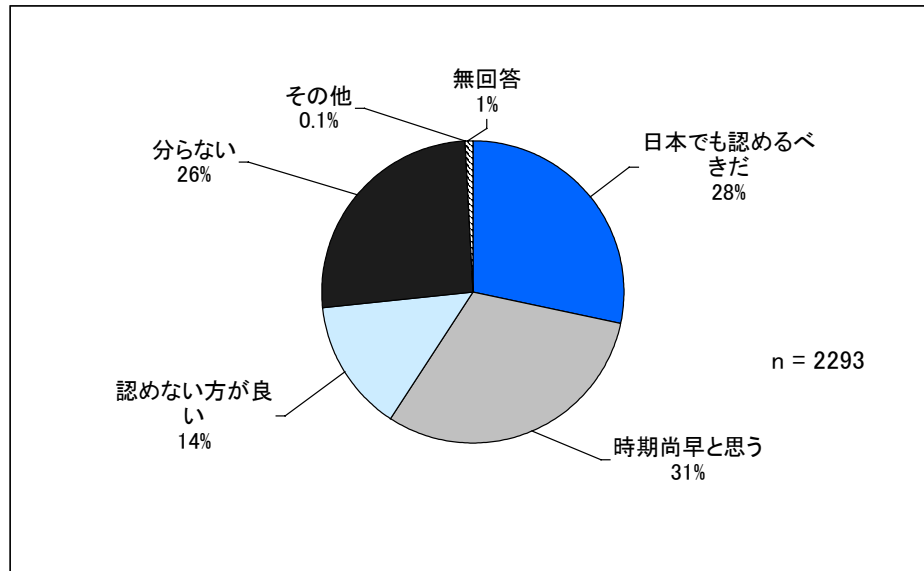
「渡していない」が 87%、「渡している」が 12%で、渡している医師は少数である。ただ、60 代以上では 21%が渡している。「渡していない」理由は「病院の薬局で渡すから」が 43%、「調剤薬局で渡すから」が 43%。「渡している」医師では加筆をする医師が 52%。

5. 医薬品の文書情報を手渡した場合、患者さんの反応はいかがですか。



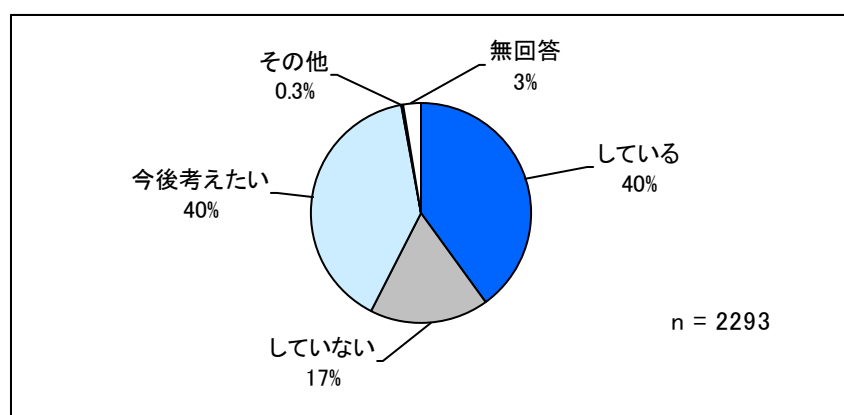
「コンプライアンスが高まった」、「質問が増えた」といった何らかの変化が見られる。

6. アメリカでは、製薬企業がTV等の広告で、処方医薬品について宣伝することが認められていますが、どう考えますか。



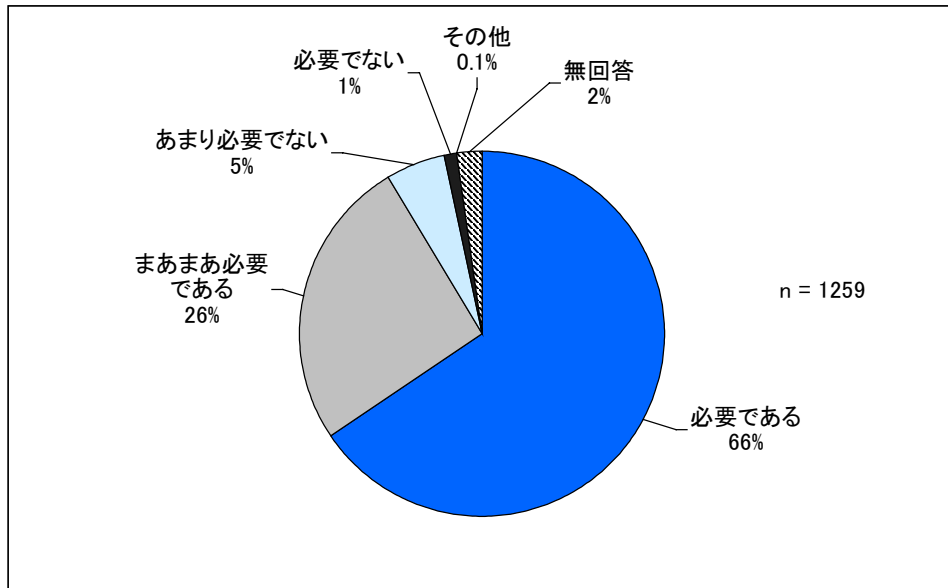
米国のような処方薬の宣伝については「日本でも認めるべき」は28%にとどまり、「時期尚早」、「認めない方がよい」といった否定的な意見が45%であった。

7. 目が見えない、口がきけない、耳が聞こえないなどのバリアーを有する患者さんにも医薬品情報を提供していますか。



視覚、言語、聴覚障害等の患者への情報提供は「している」との回答が40%、「今後考えたい」が40%と前向きな回答が多い。

8. 薬剤師の病棟活動（服薬指導）についてどのようにお考えですか。

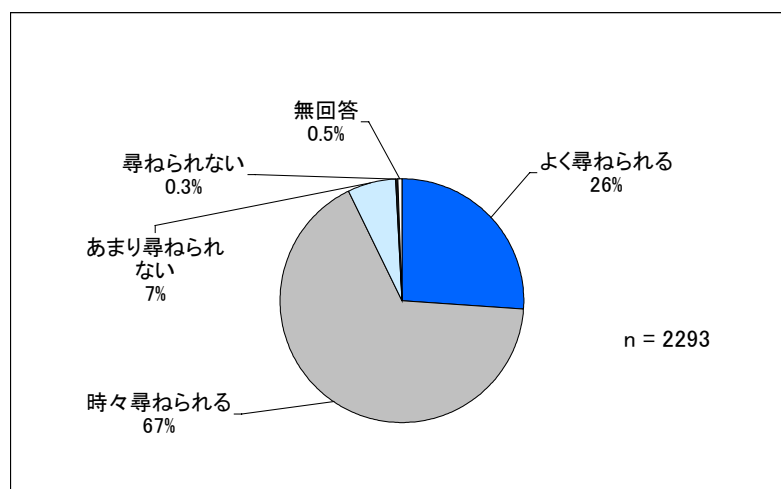


「必要」が66%、「まあまあ必要」が26%と、92%の勤務医が必要と考えている。

C 医薬品に関するコミュニケーション

1. 患者の医薬品について質問：26%がよく尋ねられる
内容：「他の薬との併用の可否」、「薬の副作用」が圧倒的
2. 尋ねられた場合の対応：60%が簡単な説明をする
3. 医薬品の説明する人：72%が医師がするのが望ましい

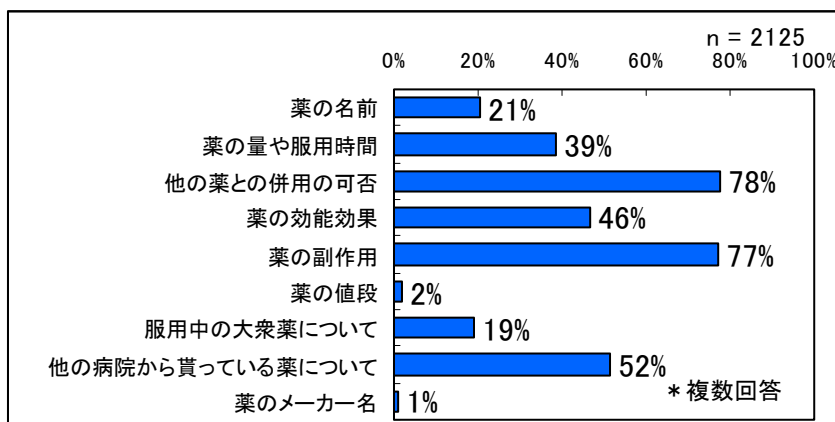
1. 患者さんから医薬品について質問されることがありますか。



「よく尋ねられる」が26%、「時々尋ねられる」が67%である。精神科の医師では「よく尋ねられる」が52%に上る。

*88年調査では「よく尋ねられる」が12%「ときどき尋ねられる」が66%であったので、医薬品について患者がよく質問するようになってきている。

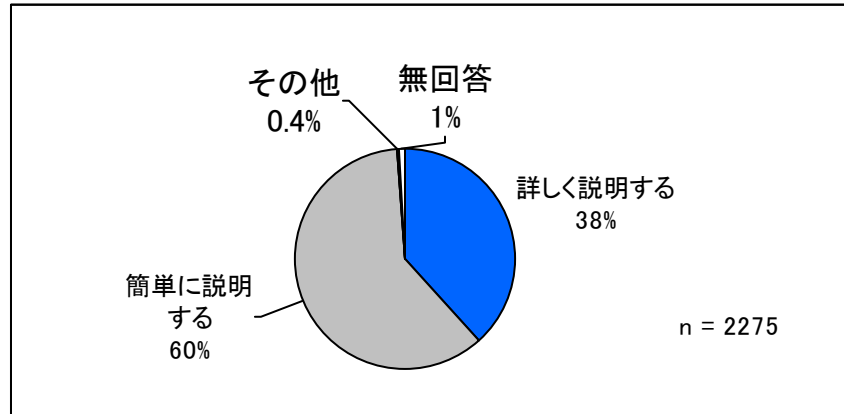
1 - 1 . 最近、患者さんからよく尋ねられるのは、どのようなことですか。



よく尋ねられるのは、「他の薬との併用の可否」が78%、「薬の副作用」が77%。

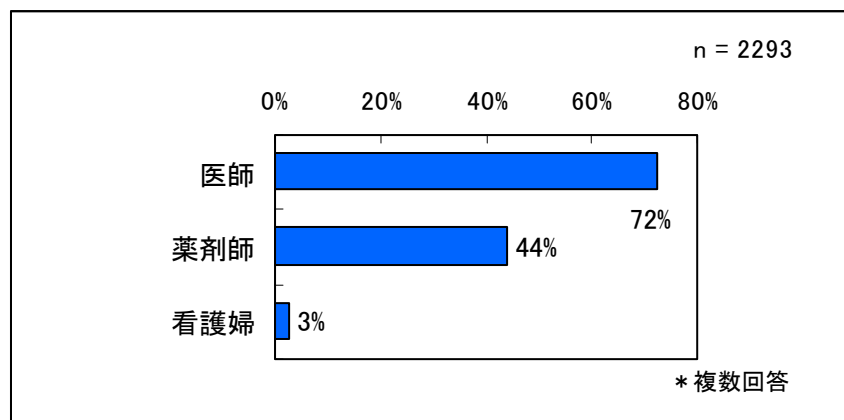
*88年調査では「他の薬との併用の可否」が72%でほぼ同じである。

2. 患者さんから医薬品について尋ねられた時は、どのように説明されますか。



「詳しく説明する」が38%、「簡単な説明をする」が60%である。

3. 医薬品についての説明は、誰からするのが望ましいですか。

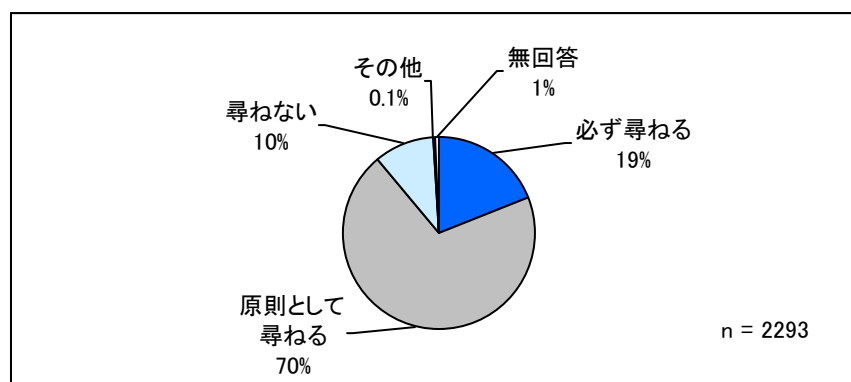


医師がするのが望ましいが72%、薬剤師が44%であった。

D コンプライアンス

1. 慢性疾患患者の服薬状況：89%の医師が尋ねている
2. 慢性疾患患者の服薬状況：73%の医師が「指示を守らない患者が時々いる」と思っている
3. 指示を守らないケース：勝手に服用中止、服用回数を守らないが圧倒的

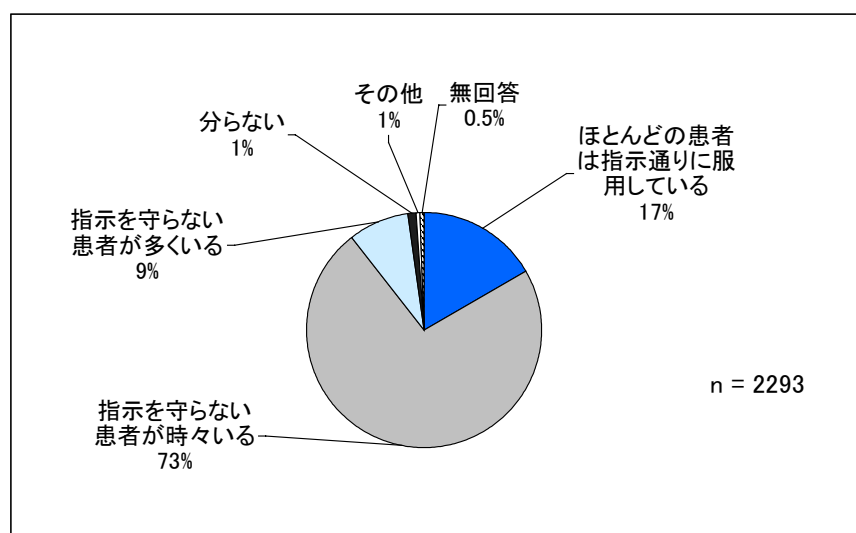
1. 慢性疾患の患者さんに対して、次の来院時に服薬状況を尋ねますか。



次の来院時に服薬状況を「必ず尋ねる」が 19%、「原則として尋ねる」が 70%であり、尋ねる医師は 89%である。

* 88 年調査では「必ず尋ねる」医師が 42%であった。

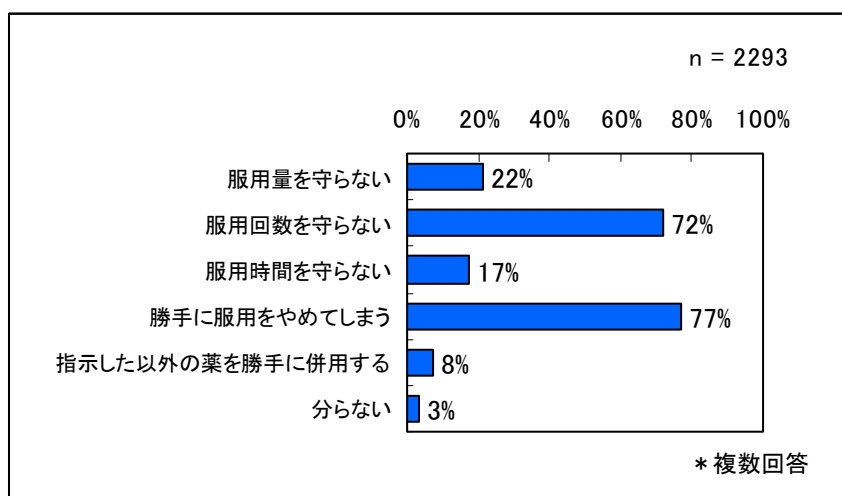
2. 慢性疾患の患者さんは、処方した医薬品を指示通りに服用していると思いますか。



「ほとんどの患者が指示どおりに服用している」は 17%にとどまり、「指示を守らない患者が時々いる」が 73%である。

* 88 年調査では「ほとんどの患者が指示どおりに服用している」が 22%、「指示を守らない患者が時々いる」が 67%であった。

3. 患者さんが指示を守らないのは、どのようなケースですか。



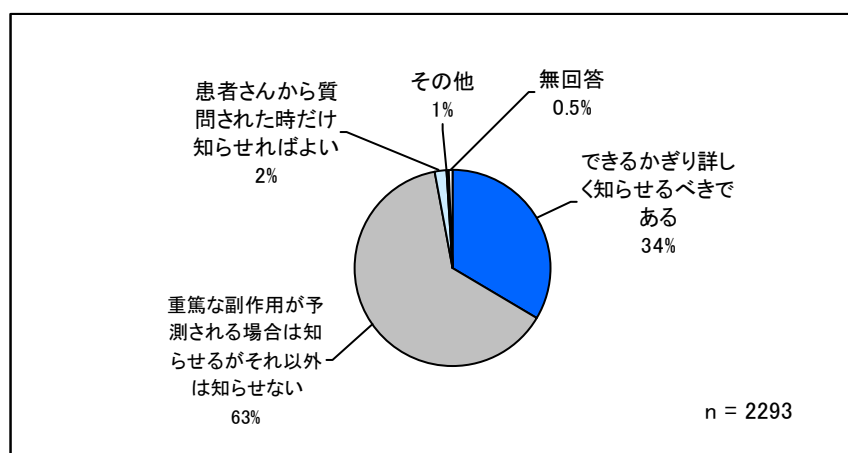
「勝手に服用を止めてしまう」が77%、「服用回数を守らない」が72%である。

* 88年調査では「勝手に服用を止めてしまう」が59%、「服用回数を守らない」が68%であった。

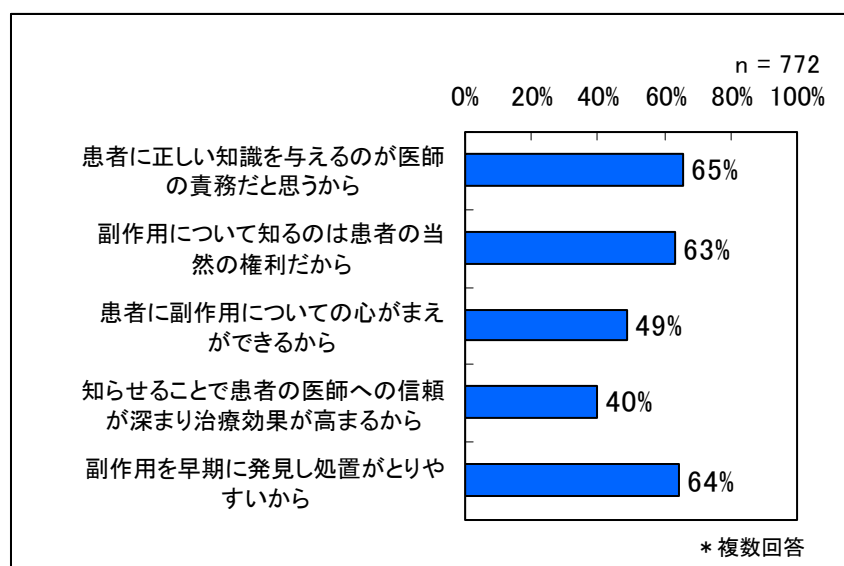
E 医薬品の副作用

1. 副作用の患者への通知：「重篤な副作用が予想される場合のみ知らせる」が 63%
2. 副作用が起きる要因：「開発段階で把握不十分」(55%)「患者の理解不足」(42%)
3. 副作用説明時の患者の反応：66%が少し不安になる
4. 副作用が発生時の対応：製薬企業への連絡が 81%と圧倒的

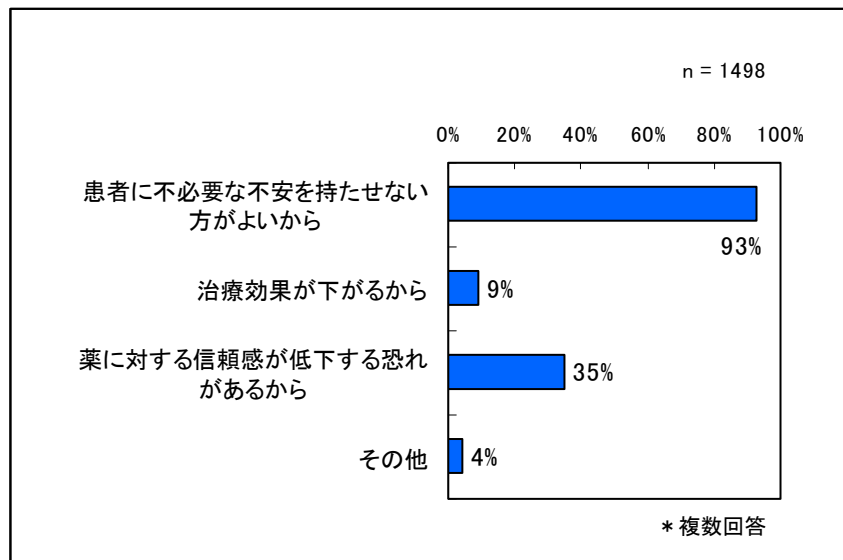
1. 医薬品の副作用について、あらかじめ患者さんにどの程度知らせるべきだと思いますか。



知らせるべきだと思う理由は何のようなことですか。(いくつでも をお付けください。)



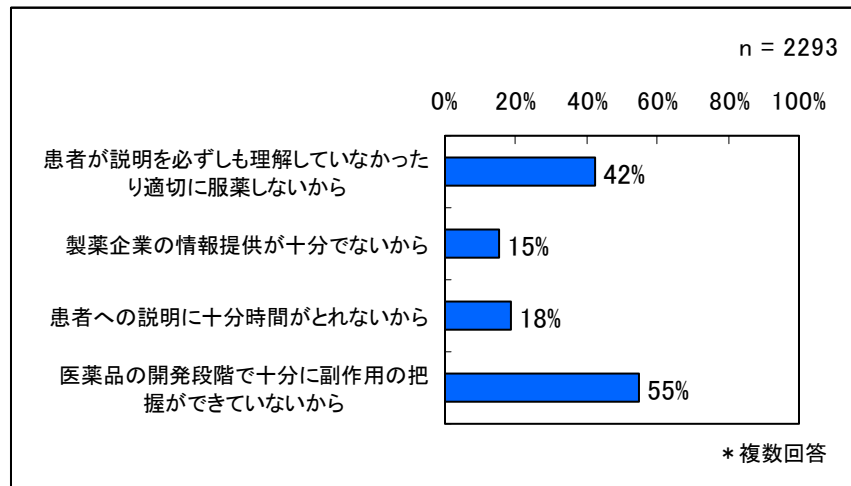
あまり知らせないほうがよいと思う理由はどのようなことですか。(いくつでも お付けください。)



「あらかじめできるだけ詳しく知らせるべき」が34%、「重篤な副作用が予想される場合のみ知らせる」が63%で、医師は状況に応じて患者に副作用を知らせている。知らせるべきだと思う理由は「患者に正しい知識を与えるのが医師の責務だと思うから」が65%、「副作用を早期に発見し処置が取り易いから」が64%、「副作用について知るのは患者の当然の権利だから」が63%であった。一方、知らせないほうがよい理由としては「患者に不必要な不安を持たせないほうがよいから」が93%であった。

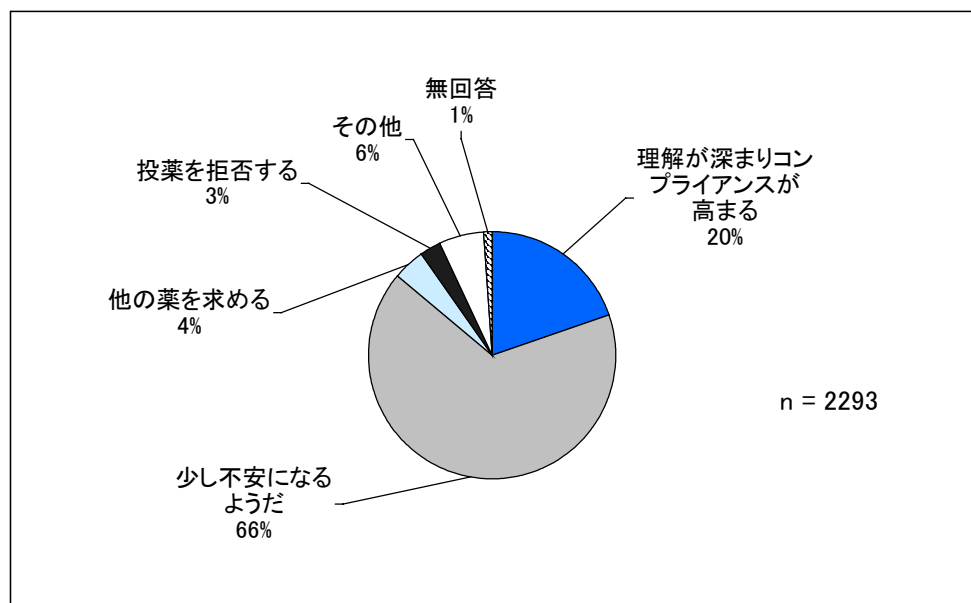
*88年調査では「あらかじめできるだけ詳しく知らせるべき」との回答が34%、「重篤な副作用が予想される場合のみ知らせる」との回答が63%であり差が見られない。

2. 医薬品の副作用が起こる要因として、大きいと思われるのはどれですか。(2つまでをお付け下さい)



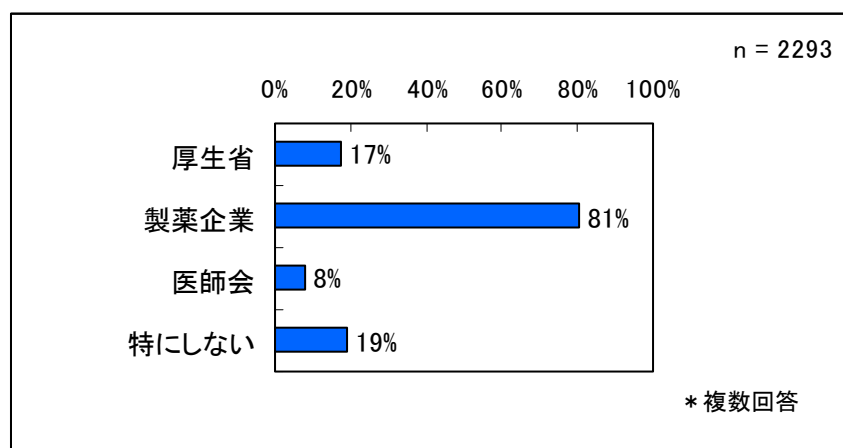
「開発段階で十分に副作用が把握できていない」が55%、「患者が説明を必ずしも理解していなかったり適切に服薬しないから」が42%であった。

3. 副作用の説明をした時、患者さんの反応でもっとも多いのはどれですか。



「少し不安になるようだ」が66%であった。

4. 副作用が発生した時、どこに報告、連絡されますか。(いくつでも)

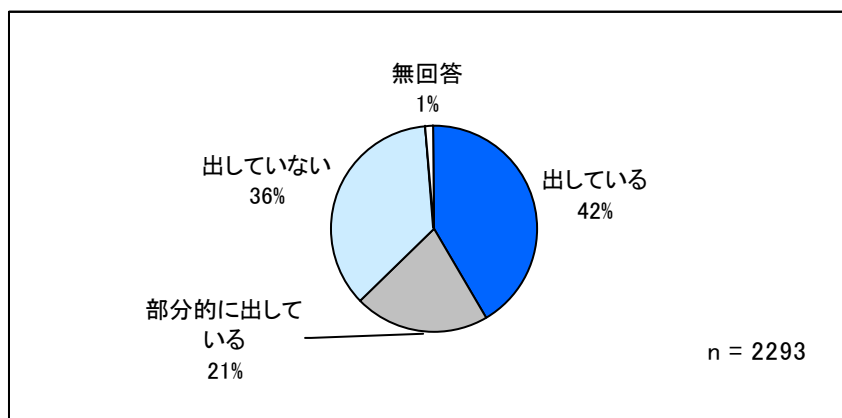


「製薬企業」に連絡する医師が81%、「厚生省」に直接報告する医師が17%であった。

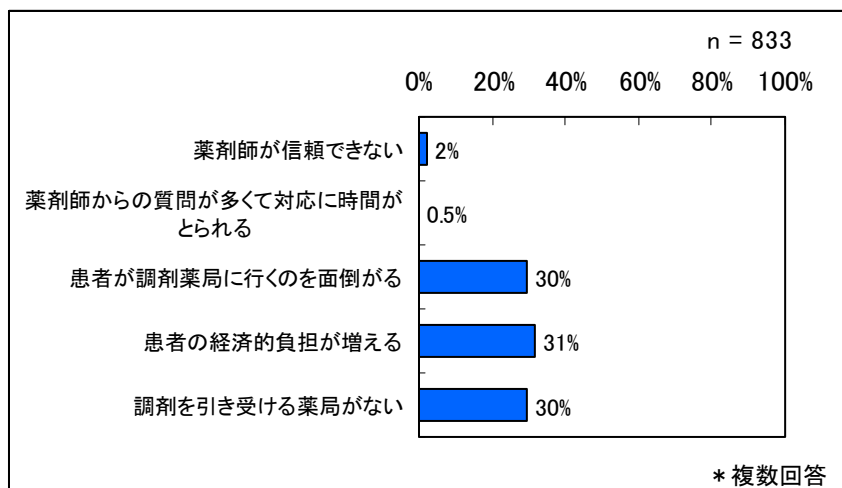
F 医薬分業

1. 院外処方箋：63%が出している
実施時期：69%がこの5年未満

1. 院外処方箋を出していますか。



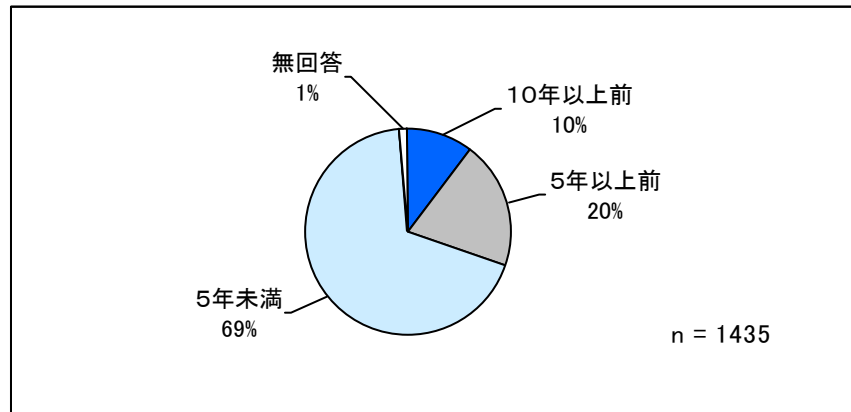
院外処方箋を出さない理由



院外処方を「出している」が42%（開業医45% 勤務医39%）、「部分的に出している」が21%（開業医17% 勤務医24%）で63%（開業医62% 勤務医63%）の医師が医薬分業に対応している。

* 88年調査では約30%の医師が分業に対応していた。（院外処方箋を「出している」（16.7%）「部分的に出している」（13.1%）であった。）

1 - 1 . いつ頃から処方箋を出していますか

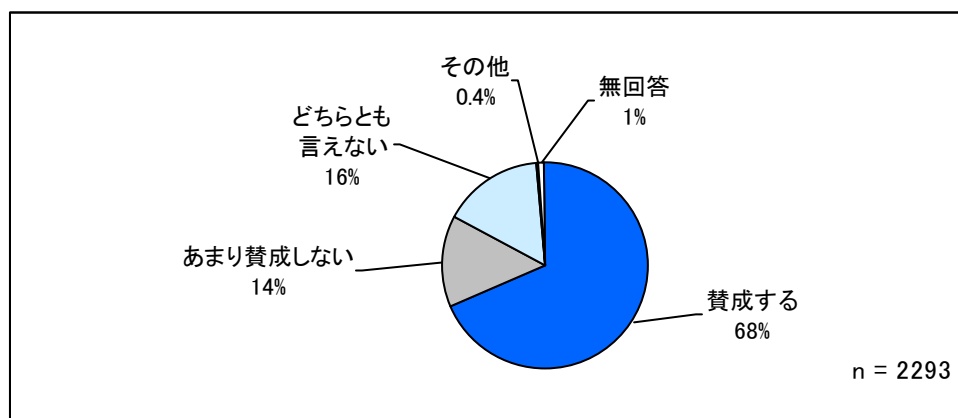


処方箋を出し始めたのはこの5年未満が69%となっている。

G 情報の開示

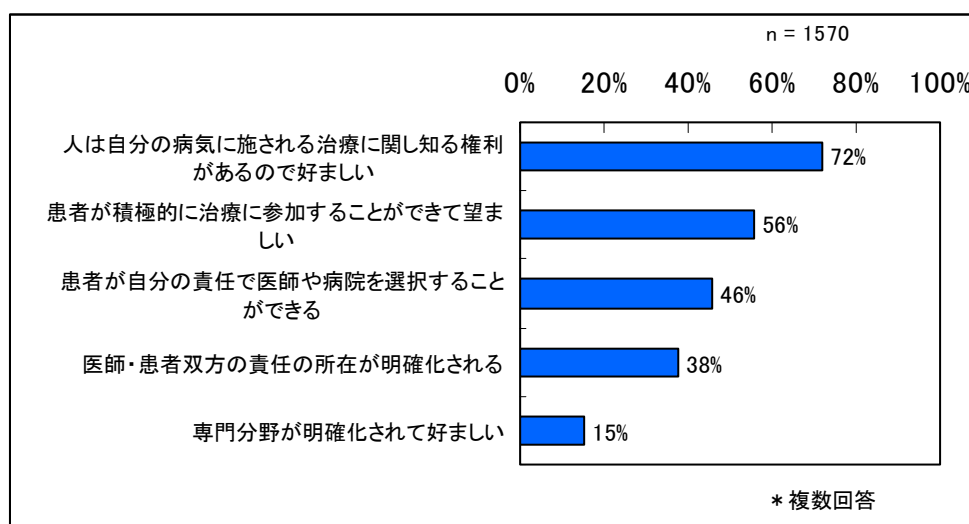
1. 医療全般の情報開示：68%が賛成
2. 告知：相手の状況による対応をしている医師が多い
3. カルテの開示請求：9%が受けたことがある

1. 医療全般に関する情報開示について、どのように考えますか。

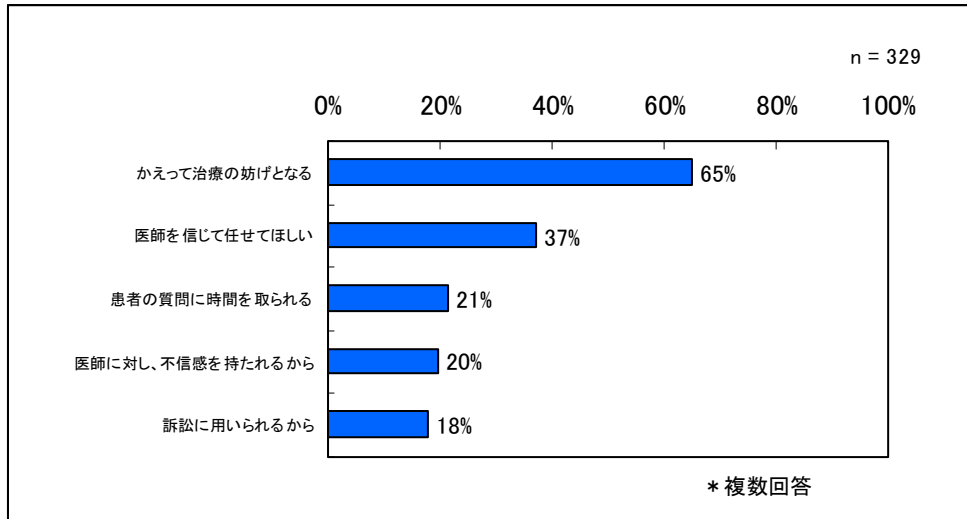


「賛成する」が68%、「あまり賛成しない」が14%。

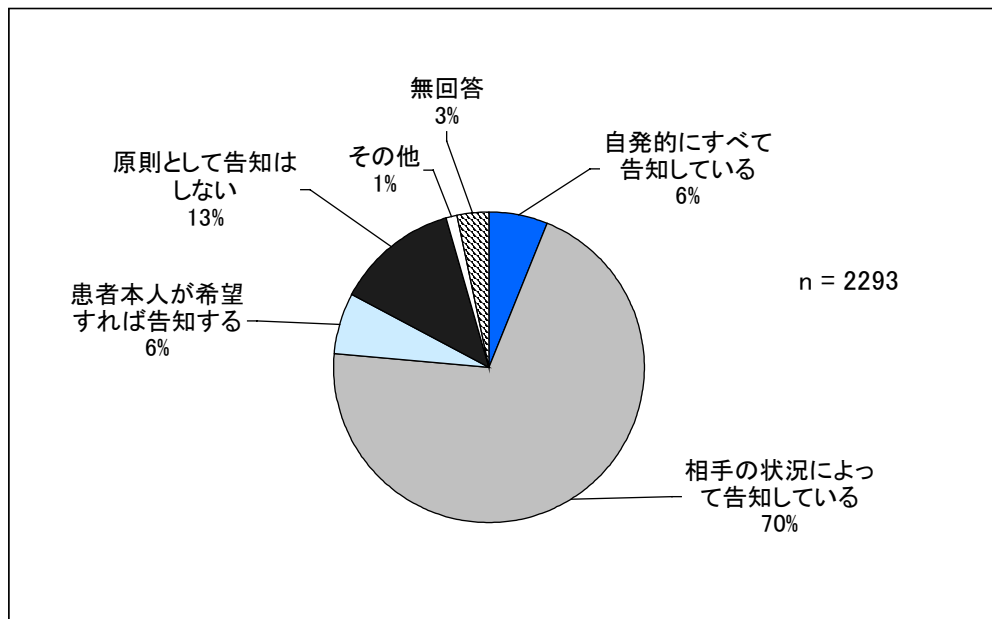
情報開示に賛成する理由



情報開示にあまり賛成しない理由

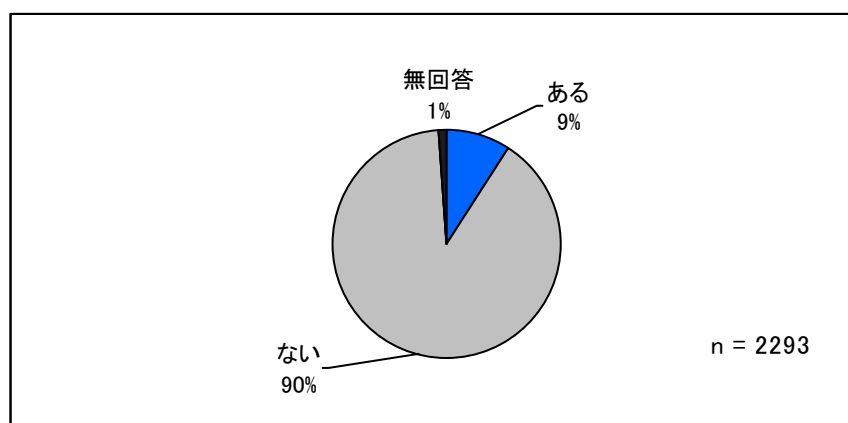


2. ガン等の難病の告知はしていますか。



「相手の状況によって告知している」が70%であった。20代の医師では「相手の状況によって告知している」が82%と高く、告知に対して前向きである。

3. カルテの開示請求を受けたことがありますか。

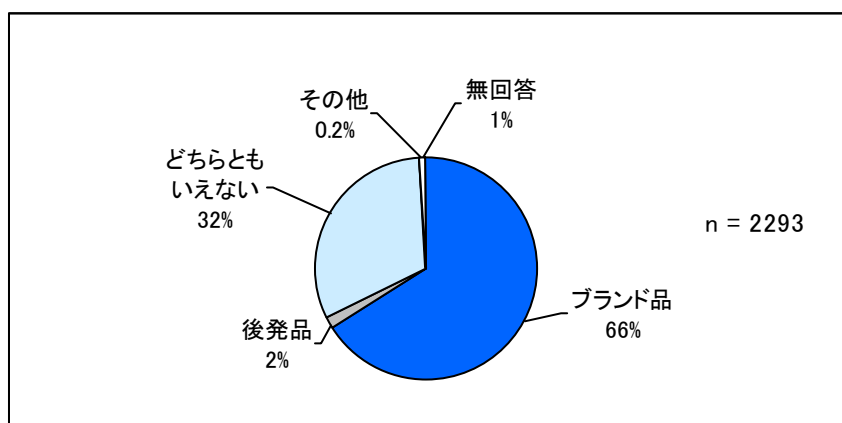


カルテ開示請求を受けたことがある医師は9%である。

H その他

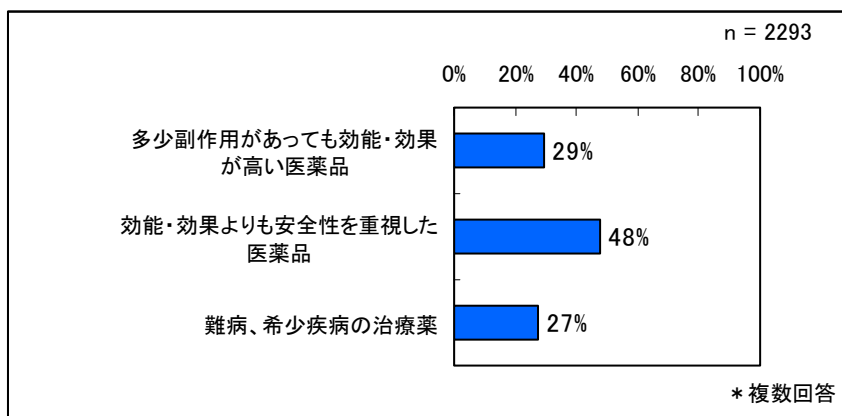
1. ブランド品の使用：66%が使用
2. 新薬の開発：48%が「効能・効果よりも安全性を重視した医薬品」の開発を期待
3. 生活改善薬：「健康人が医薬品に頼るのが問題」、「QOLの改善に役立つので開発してほしい」ほぼ同じ
4. 生活改善薬の費用負担：個人で負担すべきが78%
5. 海外承認済み医薬品：何らかの形で早く認可されることが望まれている
6. 国内承認薬の第三者による輸入：問題との意見が86%と多い

1. 医薬品のいわゆる「ブランド品」と「後発品」のどちらを主に使用されますか。



主に「ブランド品」を使用するが66%、「どちらともいえない」が32%であった。20代の医師で「どちらともいえない」が58%に上った。

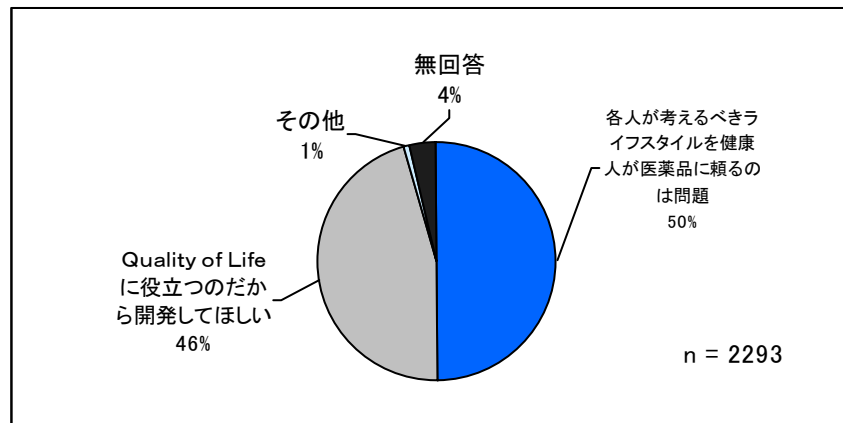
2. 新薬の開発についてなにを期待されますか。



「効能・効果よりも安全性を重視した医薬品」の開発を期待するが48%、「多少副作用があっても効能・効果が高い医薬品」が29%、「難病、稀少疾病の治療薬」が27%であった。

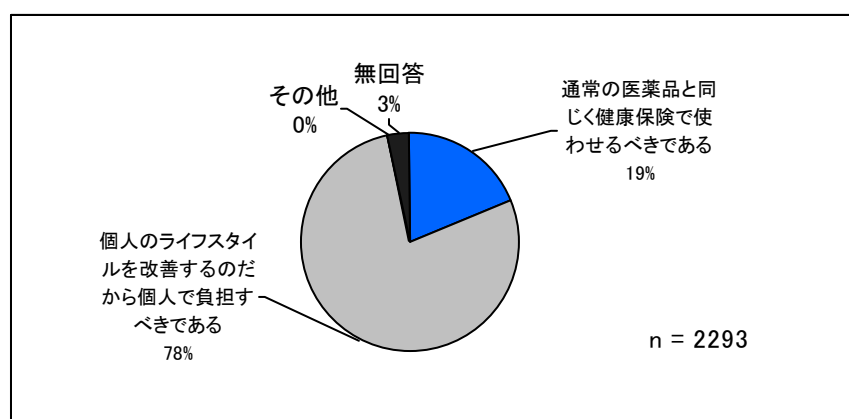
60 代以上の医師や開業医で安全性が重視されている。

3 .最近、すぐには命にかかわらないが、生活の質を向上させる「生活改善薬」(life-style drugs) と称する新しいタイプの医薬品が登場していますが、どのようにお考えですか。



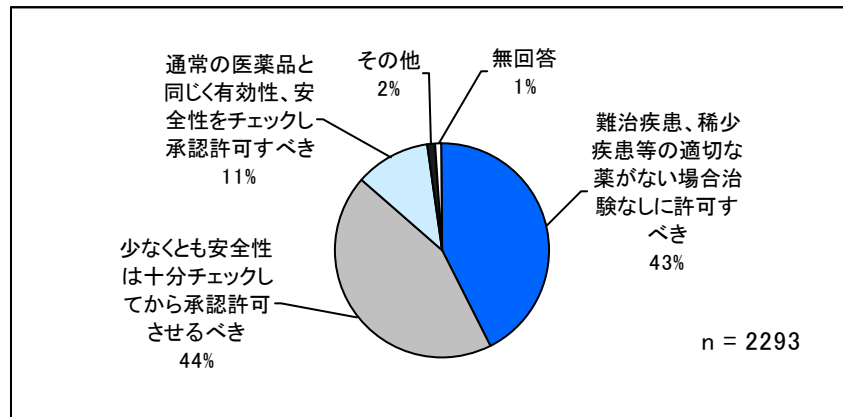
生活改善薬については「健康人が医薬品に頼るのが問題」が 50%、「Q O L の改善に役立つので開発してほしい」が 46%であり、60 代以上の医師では「各人が考えるべきライフスタイルを健康人が医薬品に頼るのは問題」とする回答が多かった。

4 .「生活改善薬」の費用負担についてはどのようにお考えですか。



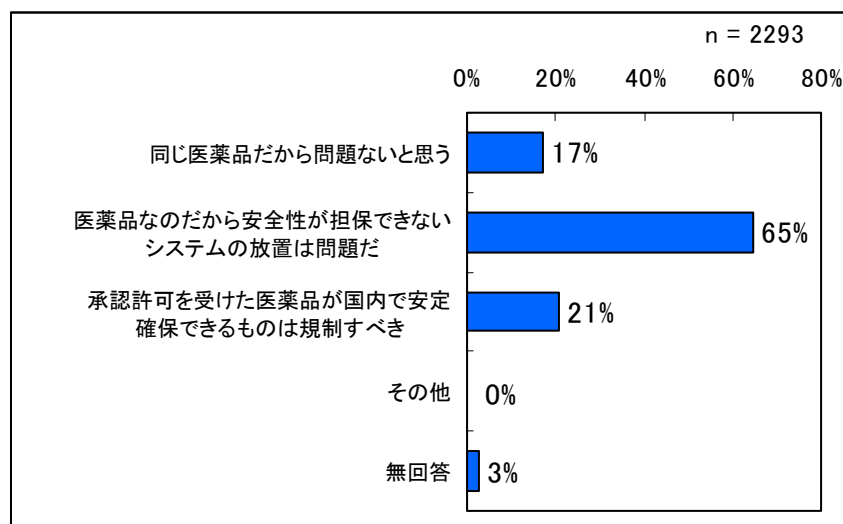
健康保険を使わず「個人で負担すべき」との回答が 78%であった。

5. 海外では承認許可・使用されているのに、我国では承認許可・使用されていない医薬品（適応外使用を含む）が結構ありますが、どのようにお考えですか。



海外では使用を許可されているが日本で未承認の医薬品については「少なくとも安全性は十分チェックしてから承認許可させるべき」が44%、「難治疾患や稀少疾患等適切な薬がない場合には治験なしに許可すべき」が43%であり、何らかの点で早く許可することが望まれている。

6. 国内で承認許可されているにも拘らず、他者が輸入（併行輸入、個人輸入代行によるケースも含めて）できるような医薬品がありますが、どのようにお考えですか。



「安全性の担保がないシステムの放置は問題」との回答が65%、「国内で安定確保できるものは規制すべき」が21%で、問題と考えている医師が86%に上っており、「問題がない」と考えている医師は17%にとどまっている。

一般市民の健康、医療および医薬品に関する意識

(概要)

． 調査の概要

調査の目的

医薬品、医療を取り巻く環境が大きく変わってきている中、医師などの医療提供者と患者・医療消費者とのコミュニケーションがますます重要になってきている。しかしながら、いまだ医療提供者と患者・医療消費者とのコミュニケーションは充分とは言い難く、今後の促進が強く望まれている。そこで本調査は、医療および医薬品に関して一般市民がどのような意識を持っているかを探るために企画実施された。

調査方法

- ・ F A Xによる配布、回収

調査対象

- ・ 全国の成人男女 2,120 人

調査期間

- ・ 1999 年 10 月

配布数・回収率

- ・ 配布数：2,120
- ・ 回収数：1,745
- ・ 回収率：82.3%

調査分析機関

- ・ 株式会社日本能率協会総合研究所

利用にあたっての留意点

- 1．数値に関しては原則として小数第 1 位を四捨五入して整数で表示した。ただし、0.5%未満の数値については小数第 2 位を四捨五入して小数第 1 位まで表示した。
- 2．単位未満の数は四捨五入しているため、内容と個々の計が合わないことがある。
- 3．単数回答においては、設問以外の回答を省略したため 100%未満のことがある。
- 4．複数回答においては数値の合計は 100%を超えることがある。
- 5．母数については各図表において“ n ”で表示してある。

. 回答者の属性

属 性	実数(人)	構成比(%)
<u>1. 性 別</u>		
男性	855	49.0
女性	890	51.0
<u>2. 年 齢</u>		
20代	323	18.5
30代	372	21.3
40代	356	20.4
50代	348	19.9
60代	346	19.8
<u>3. 職 業</u>		
経営・管理職	101	5.8
専門・技術職	225	12.9
自営業	203	11.6
常勤の勤め人	377	21.6
パート・アルバイト	229	13.1
専業主婦	428	24.5
学生	32	1.8
無職	82	4.7
その他	66	3.8
不明	2	0.1
<u>4. 最終学歴</u>		
中学卒	104	6.0
高校卒	666	38.2
短大・高専・専門学校卒	390	22.3
大学・大学院卒	584	33.5
不明	1	0.1

属 性	実数(人)	構成比(%)
-----	-------	--------

5. 現在の通院状況

慢性的な病気で通院中	398	22.8
カゼやケガなどの急性疾患で通院中	90	5.2
現在通院はしていない	1,255	71.9
不明	2	0.1

6. 居住地

北海道	109	6.2
宮城県	61	3.5
埼玉県	156	8.9
千葉県	120	6.9
東京都	318	18.2
神奈川県	151	8.7
長野県	59	3.4
愛知県	170	9.7
京都府	55	3.2
大阪府	214	12.3
兵庫県	110	6.3
広島県	59	3.4
愛媛県	47	2.7
福岡県	116	6.6

．一般市民向け調査のポイント

一般市民向け調査は、合計 53 問(内副問 16 問)の設問を A~I までの 9 つの項目に分類して、集計・分析を行った。

項目 A では、一般市民の健康状態、健康への留意点、病気になったときの対応、かかりつけ医院や薬局の有無など、「健康に関する意識」について。

項目 B では、受診経験や、医療機関への満足度等、「医師や病院に関する意識」について。

項目 C では、薬の説明について、どんな内容をどの様な方法で誰から受けたか、その内容についての理解度など「くすりの説明と理解」について。

項目 D では、薬に関連する情報を質問した経験、誰からどんな情報をほしいか、文書情報の接触度合、情報提供窓口の認識度合等「くすりの情報収集(入手)」状況について。

項目 E では、「くすりの服用」状況について。

項目 F では、「くすりの副作用に関する意識」について。

項目 G では、「医薬分業」に関連して、院外処方箋の受け取り経験の有無、分業についての受けとめ方等について。

項目 H では、医療全般に関する情報開示についての意見を始め、難病告知や、カルテ開示への意向等「医療に関する情報開示」等について。

項目 I では、項目 A~H の分類には入らない医療関連用語の認知度や、関心のある健康情報、期待する新薬の意向などについて状況を把握した。

分析・集計結果は、医師向けと同様に、副問や属性別分析を含めると膨大な量となるので、この「調査概要」は、それぞれの設問の答えのグランドトータルを中心に分析しコメントを加えた。

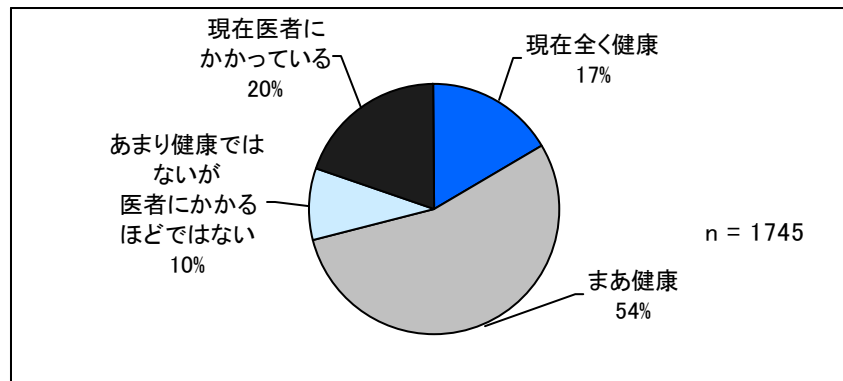
なお、副問の中の主要なものや属性別(年代、学歴、慢性・急性疾患別通院者、入院・通院別)にみて特徴的な結果がみられるものについては、コメント欄で付記すると同時に 88 年度調査と対比可能なものについては、 を付して注記したので参考にさせていただきたい。

調査の要約

A 健康に関する意識

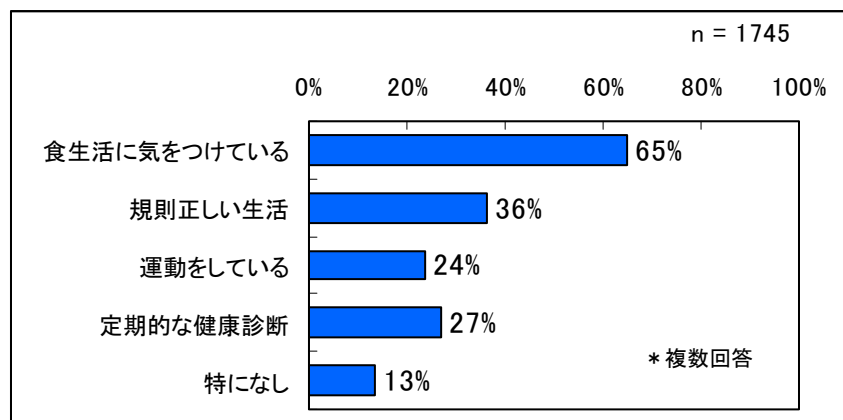
1. 現在の健康状態：71%の人は健康
2. 健康のために気を付けていること：食生活が1位
3. 軽い病気になった時：まず市販薬を飲み様子を見る
4. よく受診する医療機関：個人病院や診療所
5. かかりつけ医院：「ある」人 66%
6. かかりつけ薬局：「ある」人 34%

1. あなたの健康状態について、最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。



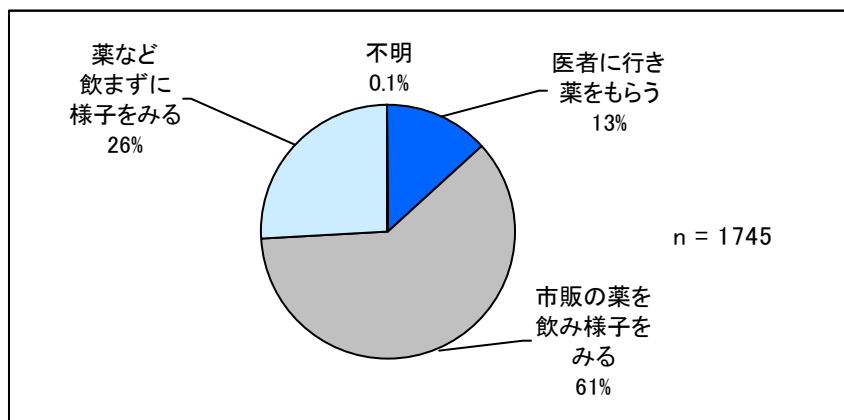
「現在全く健康」は17%、「まあ健康」は54%で、71%が健康であると思っている。また「現在医者にかかっている」人は20%だが、60代では38%と増加している。

2. あなたが健康について特に留意していることは何ですか。(は上位2つまで)



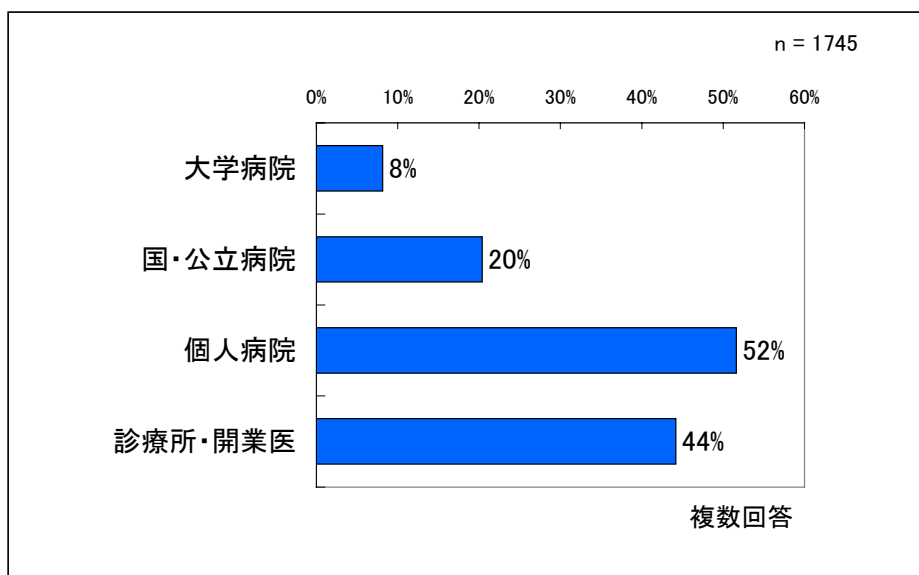
「食生活に気を付けている」が65%。年齢が上がるにつれて高く60代では73%。一方、20代では気を付けていることは「特になし」との回答が26%。

3. 普段、あなたは軽い風邪や腹痛等の病気になった時、どうしますか。最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。



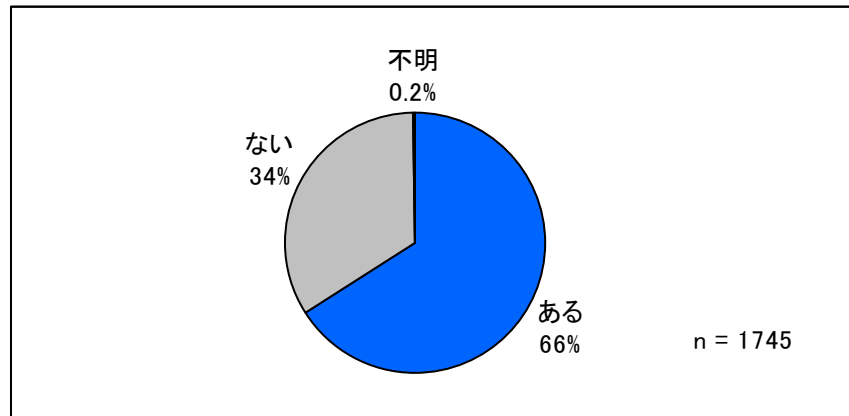
「市販の薬を飲み様子を見る」が61%、「薬などを飲まずに様子を見る」が26%で、「医者に行き薬をもらう」は13%にとどまる。「医者に行き薬をもらう」は60代では21%、慢性疾患通院者では27%となっている。

4. あなたが、よく受診する医療施設はどこですか。(はいくつでも)



よく受診する医療機関は個人病院（52%）や診療所（44%）である。

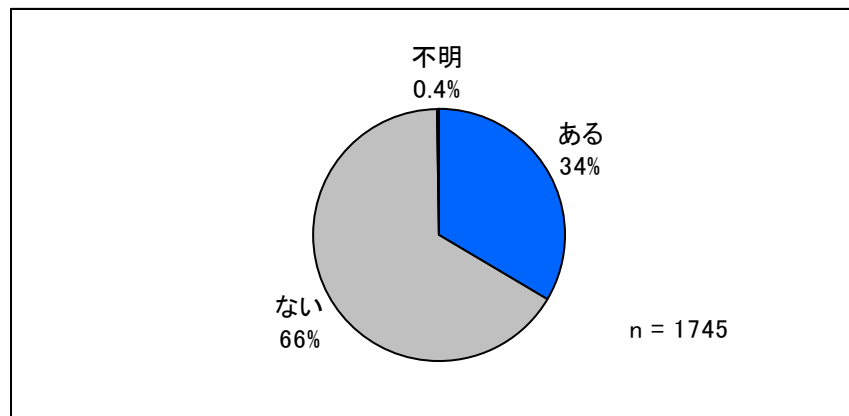
5. あなたには、かかりつけ医院がありますか。(はひとつ)



かかりつけ医院が「ある」が66%、「ない」が34%。「ある」人は20代で51%、60代では78%と年齢につれて増える。かかりつけ医院が「ない」理由は、「あまり医者にかからないから」が79%で多い。

*88年調査では、「ある」人が65%で同水準にある。

6. あなたには、かかりつけ薬局がありますか。(はひとつ)



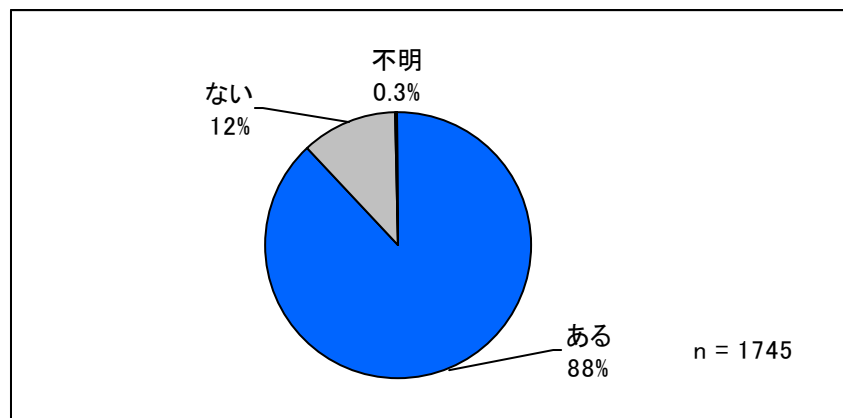
かかりつけ薬局が「ある」が34%、「ない」が66%。「ある」人は20代で28%、60代では44%と、年齢につれて増える。

かかりつけ薬局が「ない」理由は、「あまり薬局に行かないから」が75%で多い。

B 医師や病院に関する意識

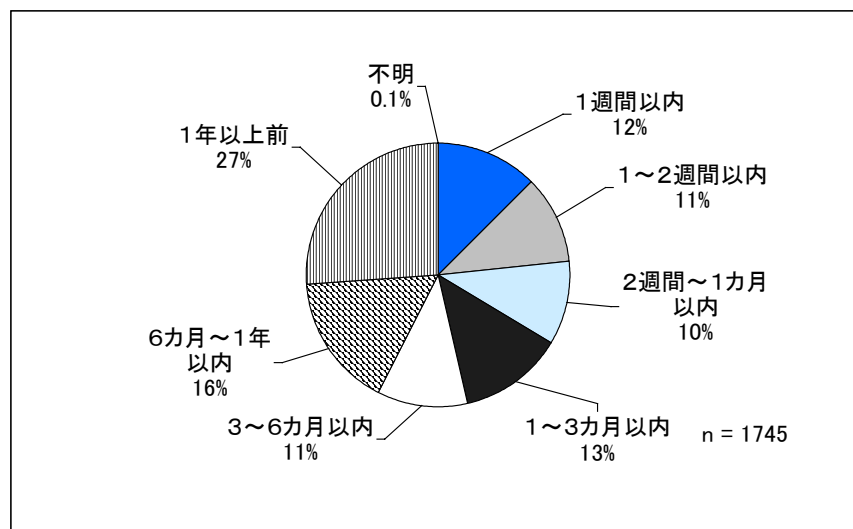
1. 3年以内の受診経験：88%がある
2. 薬をもらった経験：過半数の人が6ヶ月以内
3. 医療機関への満足度：満足している人は78%

1. あなたは、3年以内に医療を受けた（医者にかかった）経験がありますか。（はひとつ）



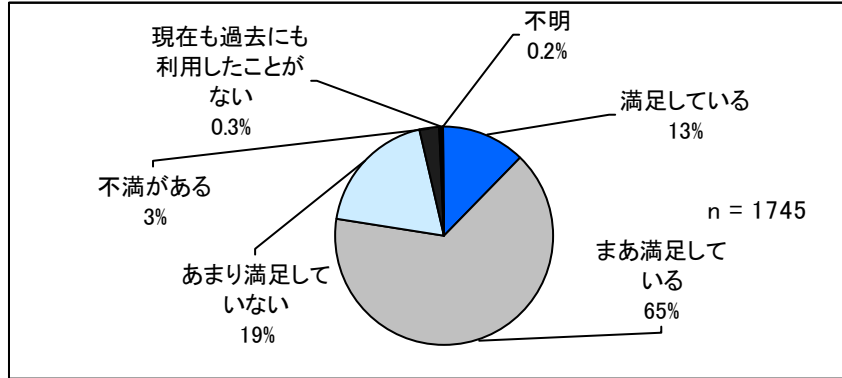
3年以内に「受診経験がある」人は88%、そのうち「通院のみ」が87%、「入院したことがある」人が13%。

2. あなたが最も最近、医院・病院（歯科や産科は除く）に行つて、薬をもらったのはいつですか。（はひとつ）



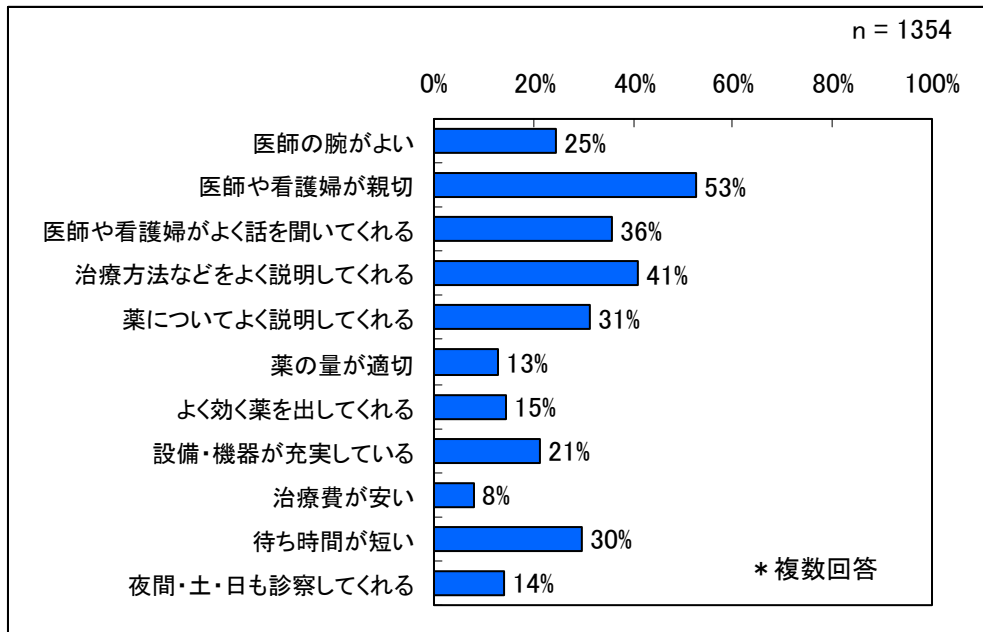
この「1週間以内」に医院や病院へ行って薬をもらった人が12%であり、過半数が6ヶ月以内に薬をもらっている。

3. あなたは、これまでに利用した（現在利用している）病院や診療所（医院）についてどの程度満足していますか。（歯科や産科は除く）（はひとつ）



医療機関に対し「満足」が13%、「まあ満足」が65%、計78%が満足。60才代では87%が満足（「満足」19%、「まあ満足」68%）。

3 - 1. 満足している点はどんなことですか。（はいくつでも）

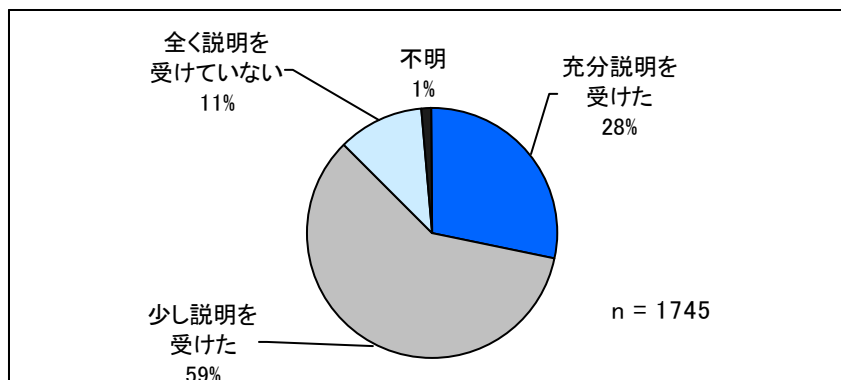


医療機関に満足している人（「満足」＋「まあ満足」）の評価が高い項目は「医師や看護婦が親切」（53%）、「治療方法などをよく説明してくれる」（41%）、「医師や看護婦がよく説明してくれる」（36%）といった接遇や説明に関するものである。

C くすりの説明と理解

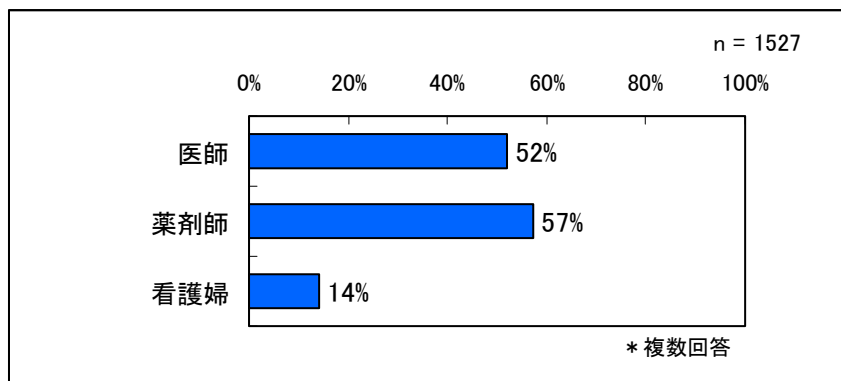
1. 薬の説明：87%が説明を受けた
 誰から：医師と薬剤師がほぼ同じ
 何を：飲み方と効き目が圧倒的
 理解：わかったが84%
2. 薬の名前の認知：40%しか覚えていない
3. 効き目と副作用の認知：知っているが70%

1. 処方された薬の「薬の名前」「効き目」「飲み方」「副作用」について、医師や薬剤師から説明（印刷物も含む）を受けましたか。（ はひとつ）



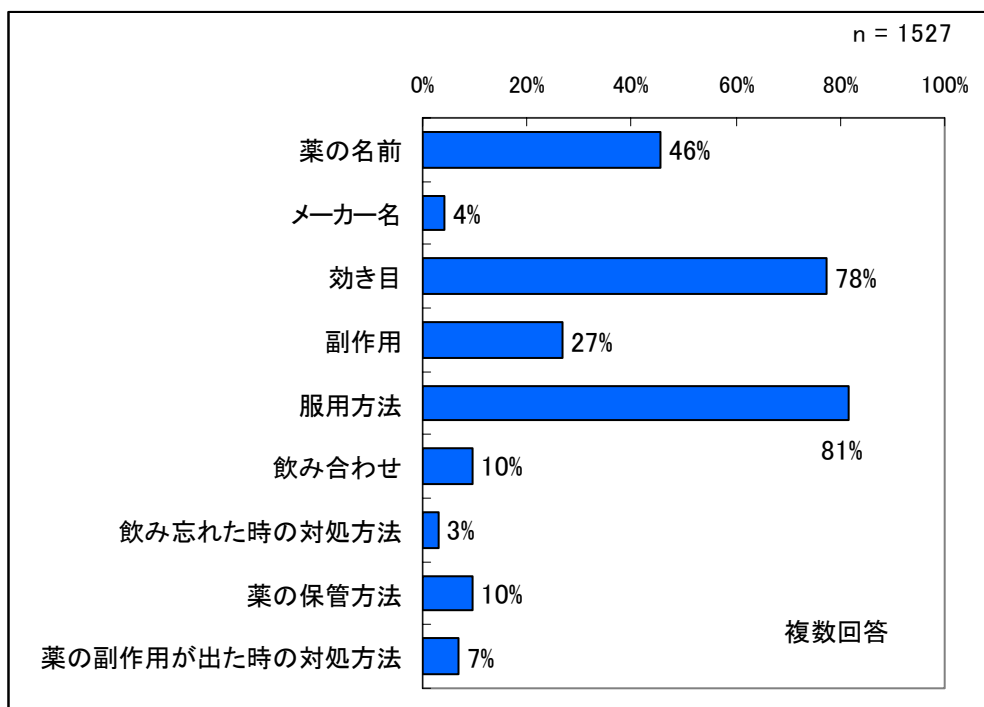
「十分に説明を受けた」が28%、「少し説明を受けた」が59%で、87%が説明を受けている。慢性疾患通院者では「十分に説明を受けた」が42%で、93%が説明を受けている。急性疾患通院者では「十分に説明を受けた」が30%で、87%が説明を受けている。

- 1 - 1. それは誰からですか。（ はいくつでも）



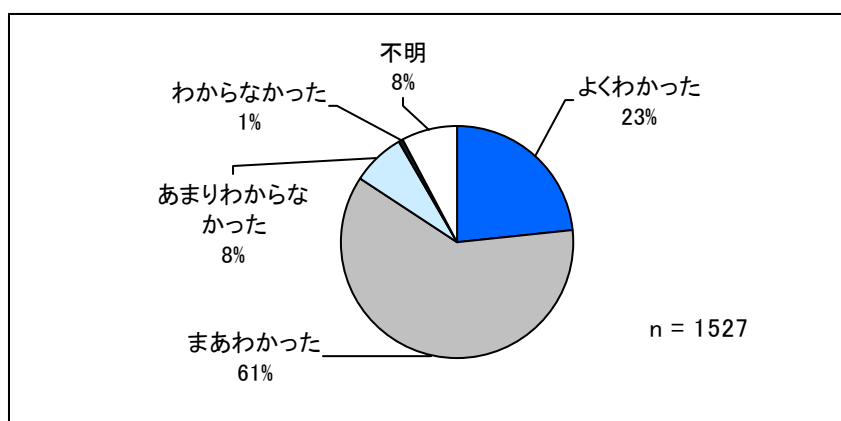
説明をしたのは薬剤師が57%、医師が52%。
 慢性疾患通院者では医師が73%、薬剤師が51%。

1 - 2 . どんな説明（印刷物を含む）を受けましたか。（ はいくつでも）



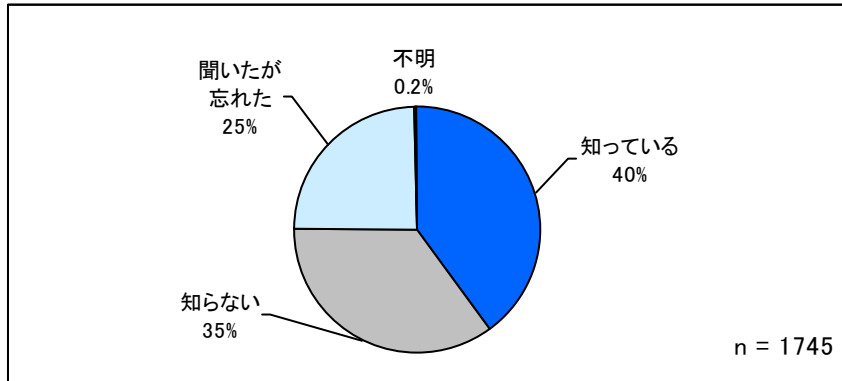
説明された内容として多いのは「服用方法」(81%)、「効き目」(78%)、慢性疾患通院者では、「副作用」について38%が説明を受けており全体(27%)に比べ高い。

1 - 3 . その説明を受けて、どの程度わかりましたか。（ はひとつ）



説明を「よくわかった」が23%、「まあわかった」が61%で、84%が理解している。慢性疾患通院者では、「よくわかった」が30%で、89%が理解している。

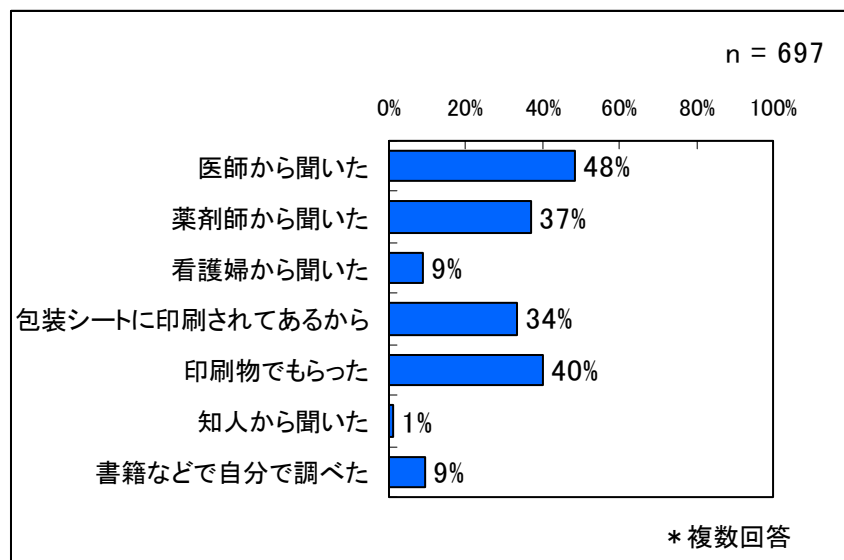
2. 処方された薬の名前を知っていますか。(はひとつ)



「知っている」が40%、「聞いたが忘れた」が25%である。

「知っている」は60代で50%、慢性疾患通院者で69%、急性疾患通院者で67%。

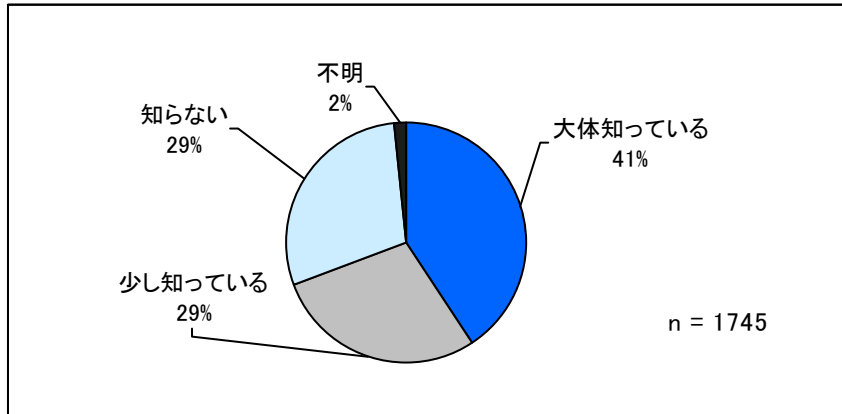
2 - 1 . 何 (誰) からですか。(はいくつでも)



薬の名前を「医師から聞いた」が48%と最も多く、「印刷物でもらった」が40%、「薬剤師から聞いた」が37%。

慢性疾患通院者では「医師から聞いた」が61%。

3. 処方された薬には、どのような効果や副作用があるかご存知ですか。(はひとつ)



「だいたい知っている」が41%、「知らない」が29%。

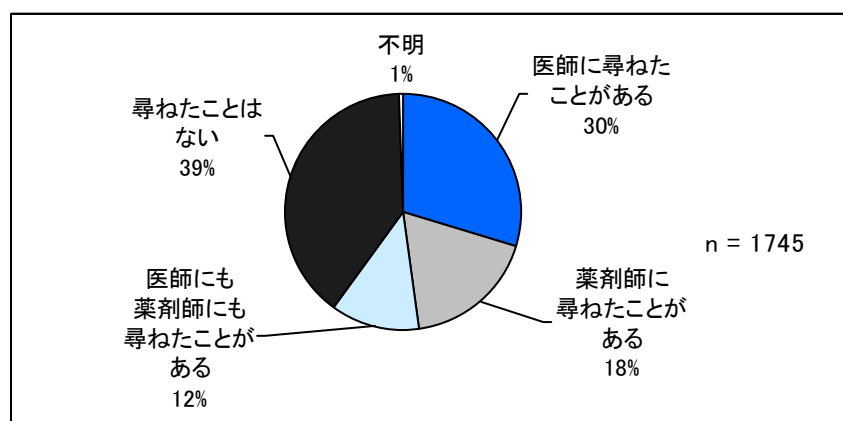
慢性疾患通院者では「だいたい知っている」が64%、「知らない」が10%。

急性疾患通院者では「だいたい知っている」が52%、「知らない」が12%。

D くすりの情報収集（入手）

1. 尋ねた経験：60%
2. 説明を受けたい人：71%が医師
3. 知りたい情報：効き目や副作用が圧倒的
4. お薬手帳：ほとんど受け取った経験なし
5. 説明書をもらった人：70%
6. 説明書をもらいたい人：88%
7. 情報の入手先：医師、調剤薬局薬剤師が圧倒的
8. 医者からもらった薬：29%が書籍で調べた経験
9. 消費者くすり相談室：ほとんど知らない

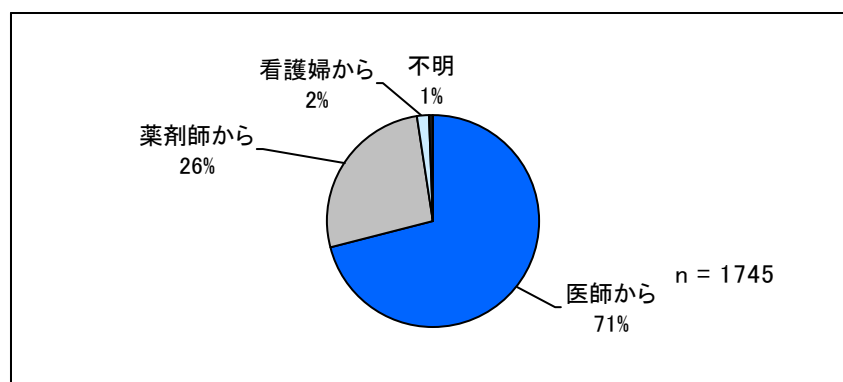
1. あなたは今まで、薬をもらう時に「薬の名前」「効き目」「飲み方」「副作用」について、医師や薬剤師に尋ねたことがありますか。（はひとつ）



「医師に尋ねたことのある」は30%、「薬剤師に尋ねたことのある」は18%、「医師にも薬剤師にも尋ねたことのある」が12%で、60%が尋ねたことがある。

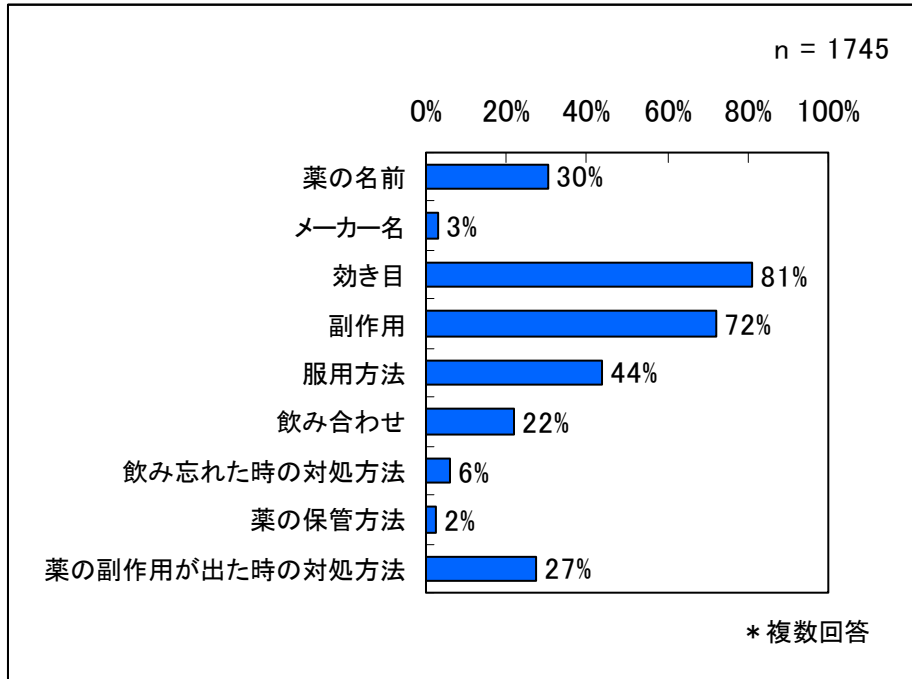
慢性疾患通院者では「医師に尋ねたことのある」が50%、「薬剤師に尋ねたことのある」が13%、「医師にも薬剤師にも尋ねたことのある」が15%であり、78%が尋ねたことがある。

2. 「薬の説明」を誰から聞きたいですか。最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。



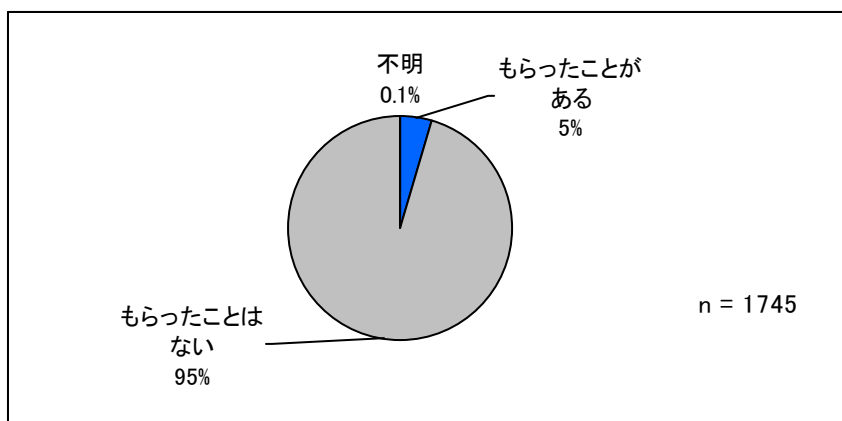
薬の説明を「医師から聞きたい」が71%、「薬剤師から聞きたい」が26%。「医師から聞きたい」は20代では61%、60代では74%と高齢者ほど医師から聞きたがっている。慢性疾患通院者は「医師から聞きたい」が84%。

3. 薬をもらう時、どんな情報が知りたいですか。(は上位3つまで)



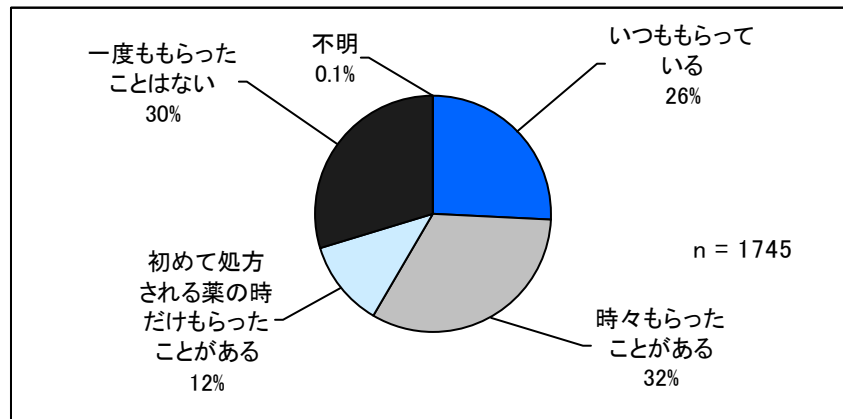
知りたい情報として多いのは「効き目」(81%)や「副作用」(72%)。

4. 病院や薬局で「お薬手帳」をもらったことがありますか。(はひとつ)



お薬手帳をもらったことがある人は5%にとどまる。

5. 病院や薬局で、薬の説明が書かれた紙をどの程度もらったことがありますか。(はひとつ)

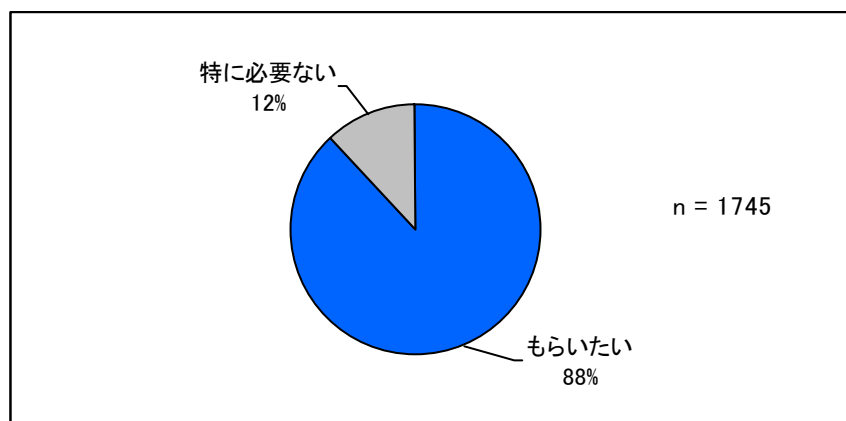


「いつももらっている」が26%、「時々もらったことがある」が32%、「初めて処方される薬の時だけもらったことがある」が12%で、70%がもらった経験がある。

慢性疾患通院者では「いつももらっている」が33%と比較的多い。

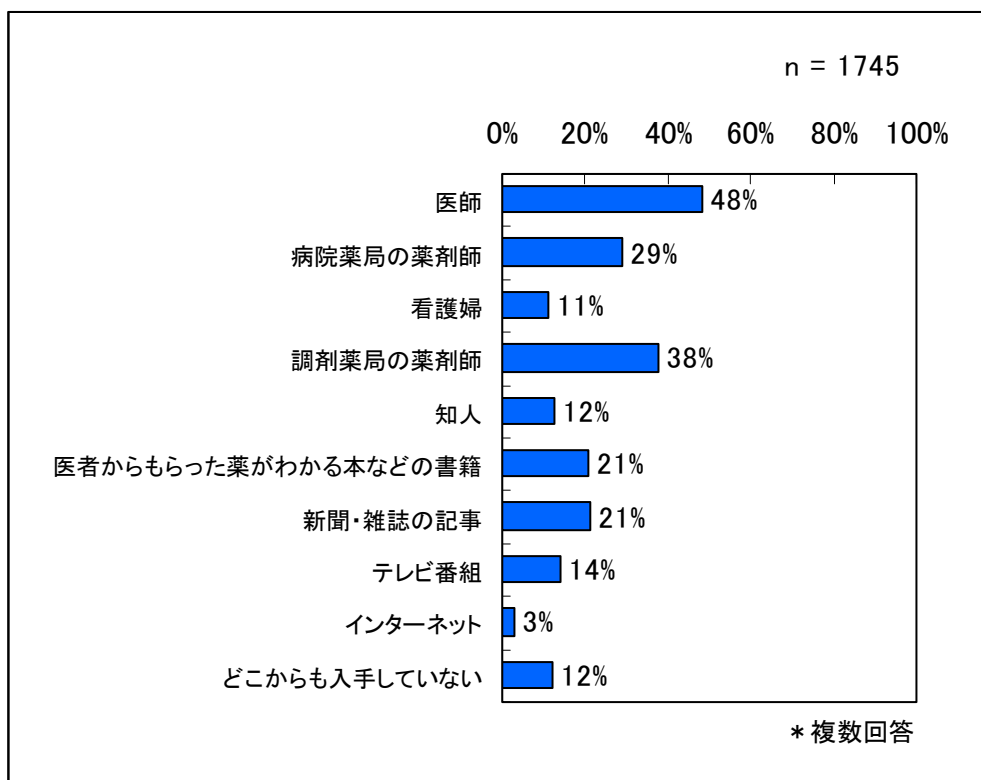
急性疾患通院者では「いつももらっている」が42%、「時々もらったことがある」が42%で、91%がもらったことがある。

6. 薬の説明をしたものを印刷物でもらいたいと思いますか。(はひとつ)



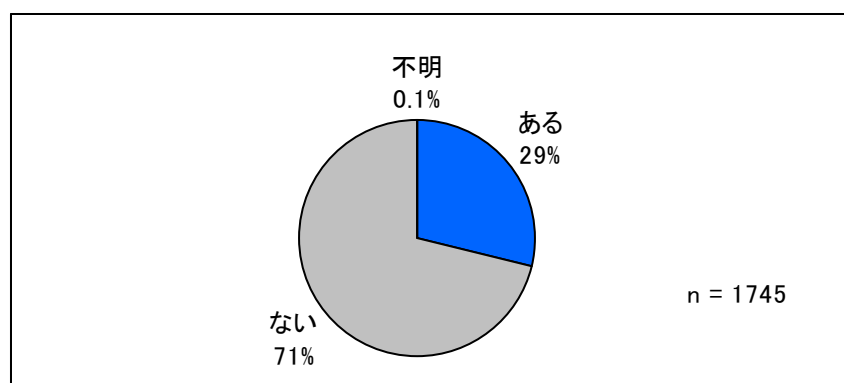
88%の人が薬の説明をしたものを印刷物でもらいたいと思っている。

7. くすりについての情報を、どこから入手していますか。(はいくつでも)



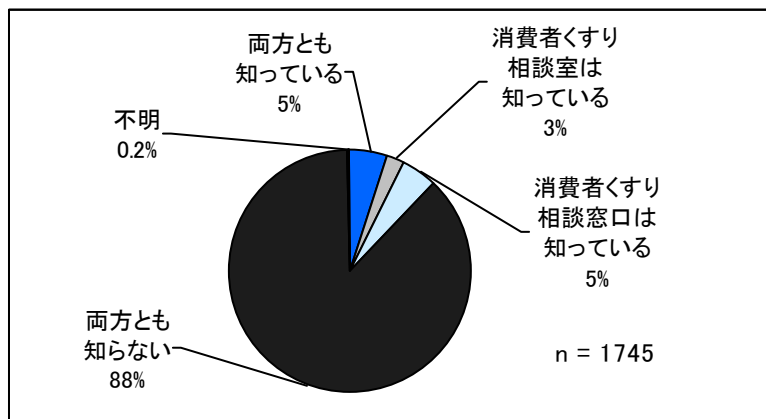
薬についての情報の入手先としては第1位が「医師」からで48%。「調剤薬局の薬剤師」からが38%、「病院薬局の薬剤師」からが29%。「医師」からは60代では59%。慢性疾患通院者では71%。

8. 「医者からもらった薬がわかる本」等の書籍で、あなたに処方されている薬について調べたことがありますか。(はいひとつ)



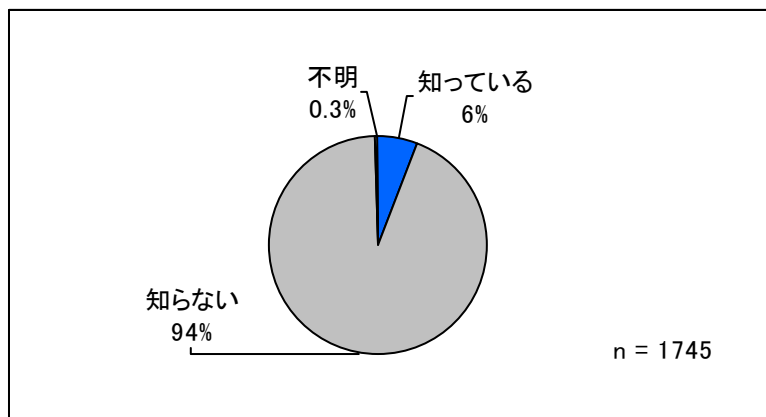
29%の人がもらった薬を書籍で調べたことがある。慢性疾患通院者では35%が調べたことがある。

9. 現在、厚生省の関係機関として「消費者くすり相談室」が、またそれを受けて各製薬会社にも「消費者くすり相談窓口」が設置されていることをご存知ですか。(はひとつ)



「両方とも知っている」が5%、「消費者くすり相談室は知っている」が3%、「消費者くすり相談窓口は知っている」が5%で、「両方とも知らない」は88%であった。

10. 厚生省が1999年5月からインターネットで、医薬品の添付文書(効能書)や安全性情報を提供していることを知っていますか。(はひとつ)

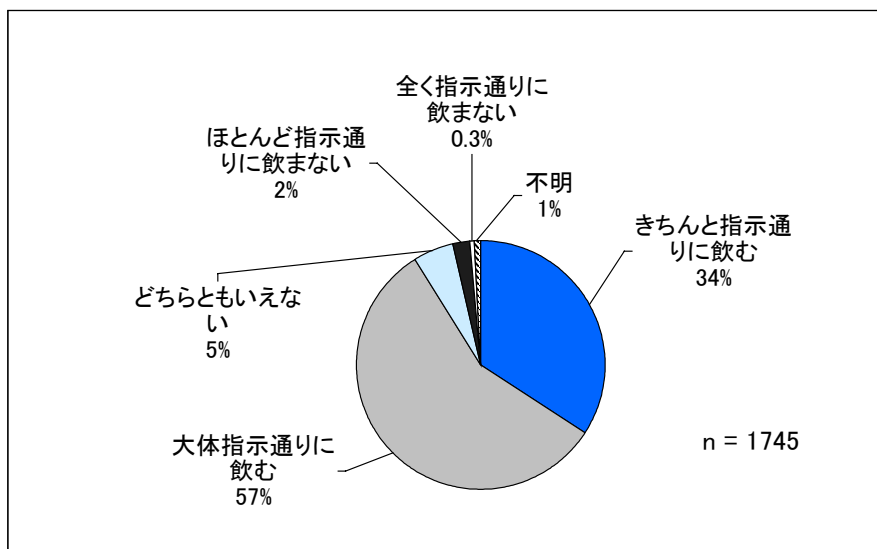


「知っている」人は6%である。

E くすりの服用

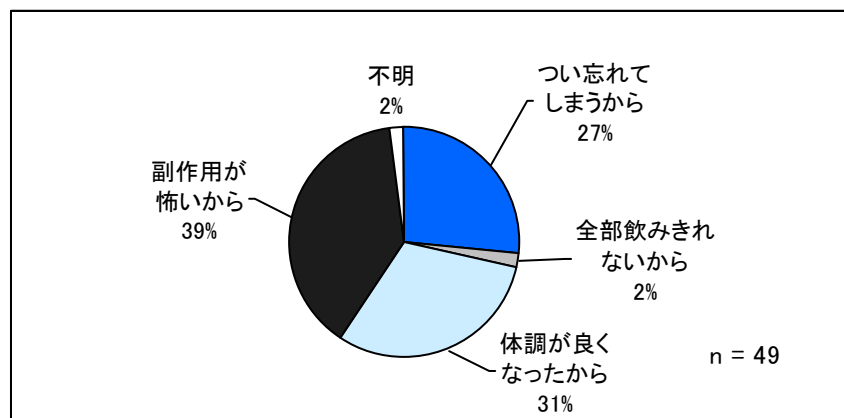
1. きちんと指示通りに飲む：「きちんと指示通りに飲む」は34%
2. 余った時：「しばらく保存する」が圧倒的

1. もらった薬をきちんと指示通りに飲みますか。(はひとつ)



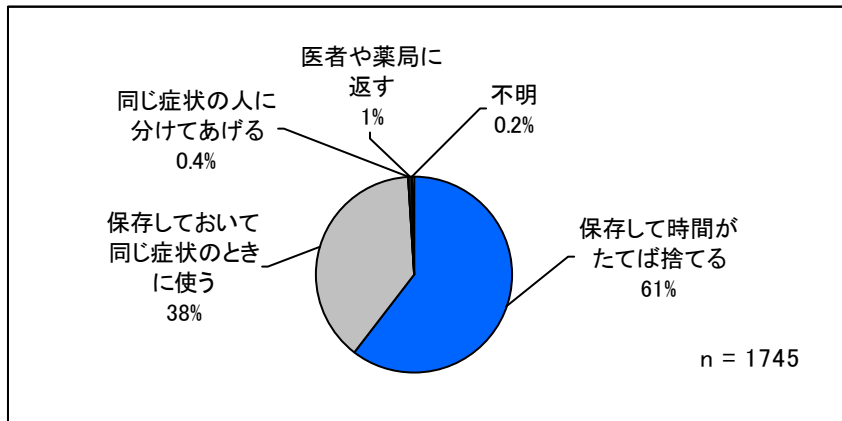
「きちんと指示どおりに飲む」が34%、「だいたい指示どおりに飲む」が57%。
20代では「きちんと指示どおりに飲む」は28%、60代では44%と高齢者の方が高い。

1 - 1. 指示通りに飲まない理由は何ですか。最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。



指示どおりに飲まない理由は、「副作用が怖いから」が39%、「体調がよくなったから」が31%、「つい忘れてしまう」が27%。

2. 普段、病院や医院で処方された薬が余った時はどうしていますか。最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。

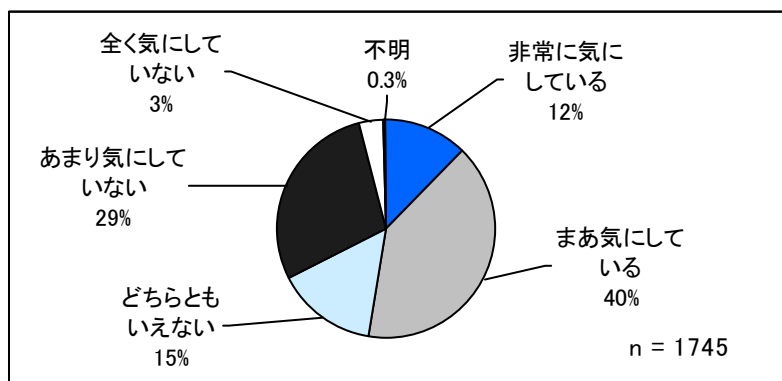


「保存して時間がたてば捨てる」が 61%、「同じ症状の時に使う」が 38%。

F くすりの副作用に関する意識

1. 非常に気にしている：12%
2. 経験：39%がある
3. 考え方：「人によって、症状によって出る」が圧倒的

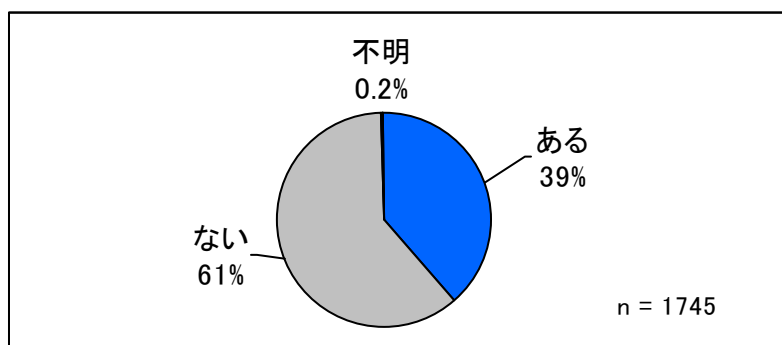
1. 薬を飲む時、副作用をどの程度気にしていますか。(はひとつ)



「非常に気にしている」が12%、「まあ気にしている」が40%で、52%が副作用を気にしている。慢性疾患通院者では「非常に気にしている」が18%、「まあ気にしている」が44%で、62%が気にしている。

* 88年調査では「いつも心配に思っている」が17%、「ときどき心配に思う」が49%で、65%が心配していた。

2. 過去に薬の副作用と思われる経験をしたことがありますか。(はひとつ)

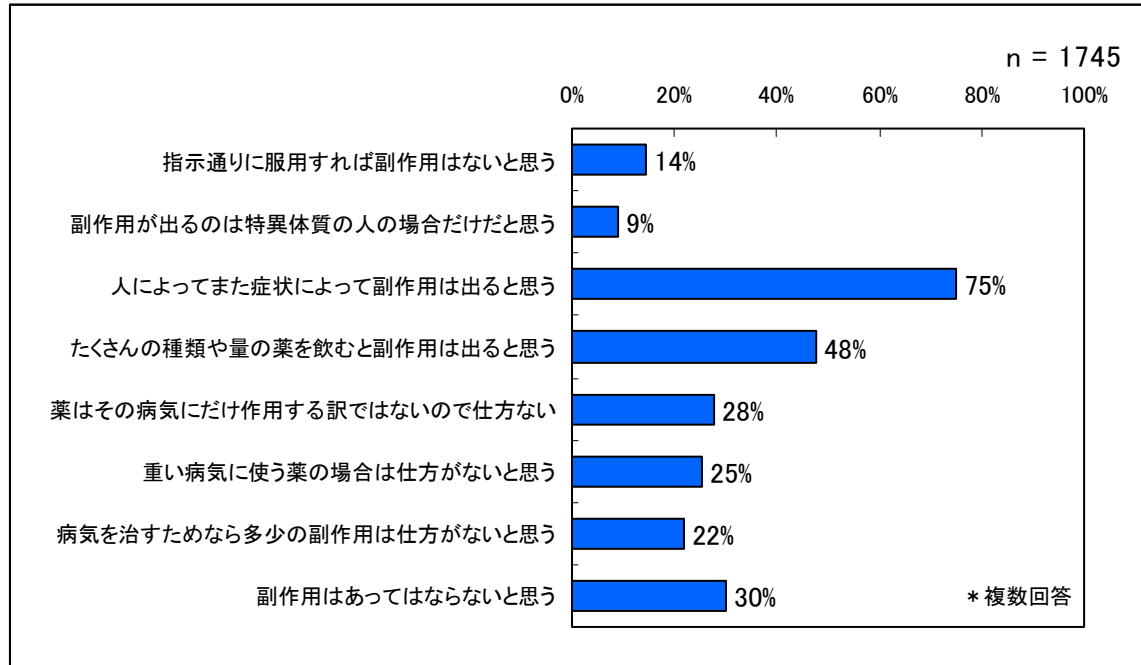


「ある」が39%、「ない」が61%。

慢性疾患通院者では「ある」が52%。

* 88年調査では「副作用の経験がある」人は12%であった。

3. 薬の副作用について、どうお考えですか。(はいくつでも)

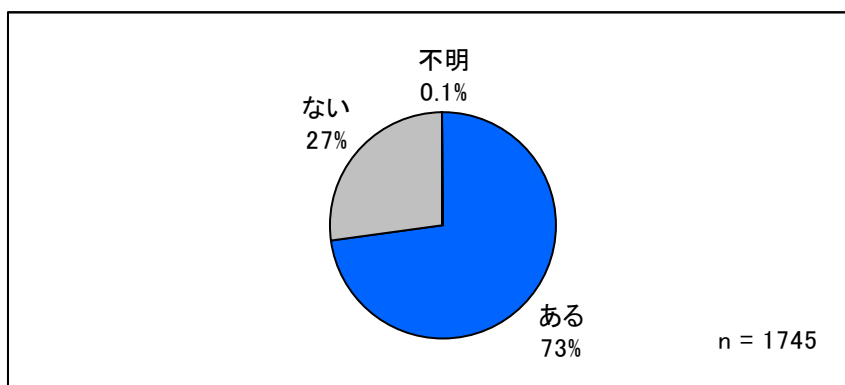


副作用は「人によってまた症状によって出たりすると思う」が75%、「たくさん種類や量の薬を飲むと出ると思う」が48%である。

G 医薬分業

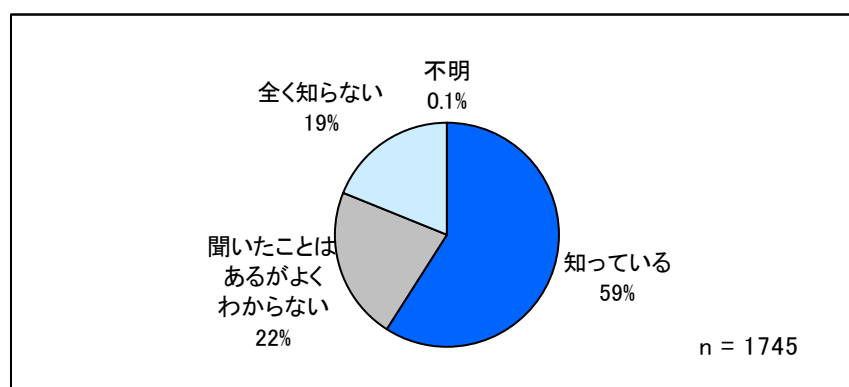
1. 院外処方箋：受け取った人は73%
2. 推進の認知：59%が知っている。
3. 受けとめ方：「時間短縮」「十分な説明」「経済的負担増」「不便」が横並び

1. 院外処方箋を受け取り、病院外の保険薬局で薬を受け取ったことはありますか。(はひとつ)



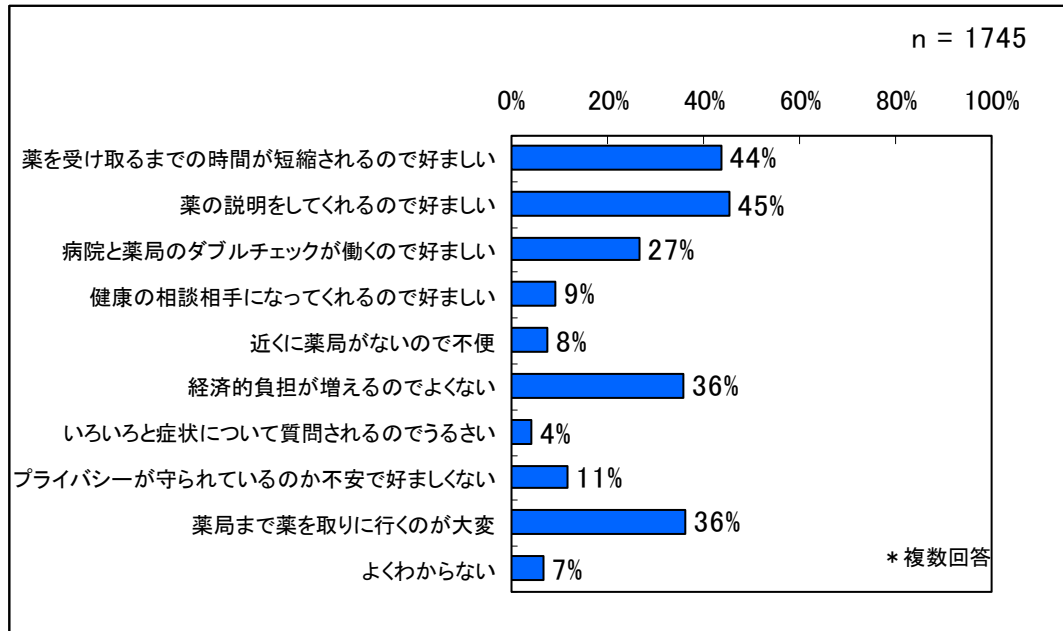
73%の人が院外処方箋を受け取り、病院外の保険薬局で薬を受け取ったことがある。

2. 現在、国の方針として医薬分業（薬は病院ではなく、保険薬局で受け取る）が進められていますが、ご存知ですか。（はひとつ）



「知っている」が59%、「聞いたことはあるがよくわからない」が22%。
「知っている」は20代は43%、60代で71%と年齢につれて高くなる。
慢性疾患通院者では「知っている」が71%と高い。

3. 医薬分業についてどうお考えですか。(はいいくつでも)

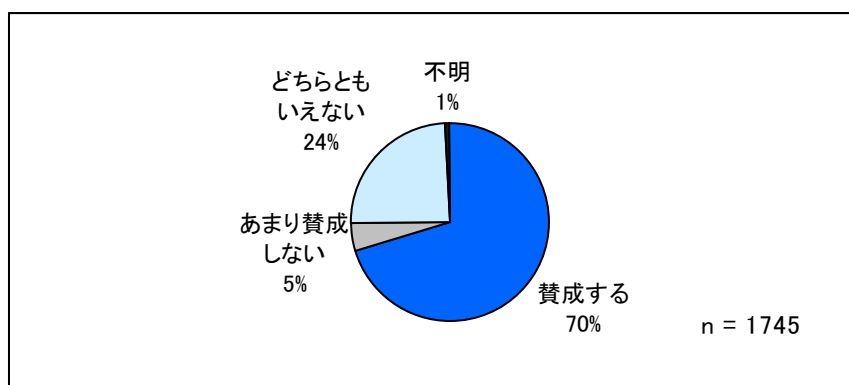


医薬分業に対して「薬の説明をしてくれるので好ましい」が45%、「薬を受け取るまでの時間が短縮されるので好ましい」が44%といった回答がある一方、「薬局まで薬を取りに行くのが大変」(36%)、「経済的負担が増えるのでよくない」(36%)といった回答もあった。

H 医療に関する情報開示

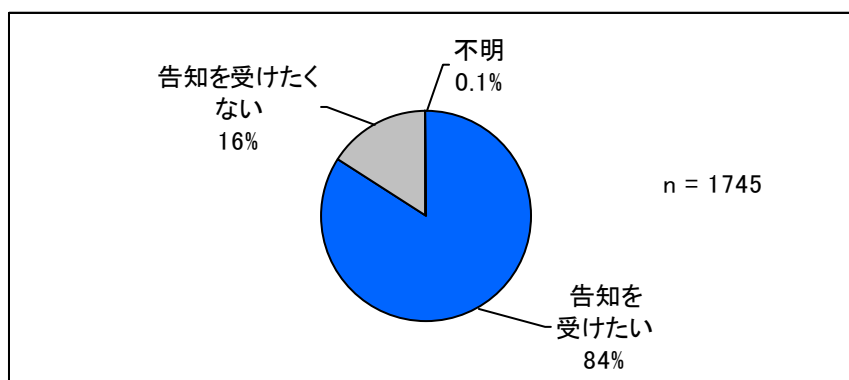
1. 医療全般の情報開示：賛成 70%
2. 告知：84%が受けたい
3. カルテ開示：86%が希望

1. 医療全般に関する情報開示が議論されていますが、あなたはどのように考えますか。



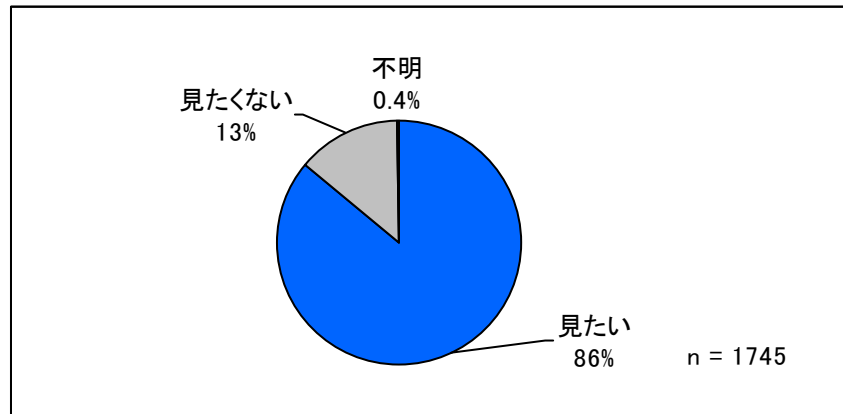
賛成が70%、大学・大学院卒では79%と高い。賛成する理由（複数回答）として多いのは「自分の病気について知る権利があるから」（85%）である。一方、あまり賛成しない人が5%おり、理由（複数回答）として多いのは「過度の情報は患者に不安を与える」（68%）であった。

2. あなたご自身にガン等の難病が発見された場合、告知を受けたいですか。（はひとつ）



難病が発見された時に「告知を受けたい」人は84%に達している。30代では90%であるのに対し、60代では76%であった。

3. 自分のカルテを見たいと思いますか。(はひとつ)

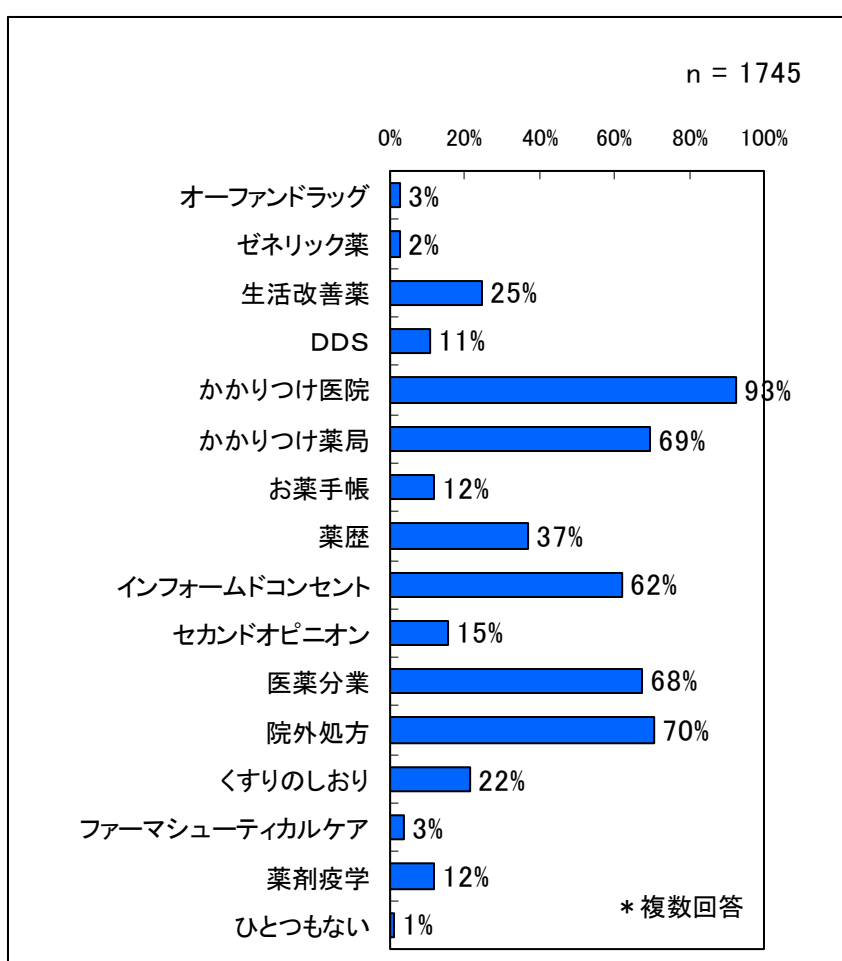


自分のカルテを「見たい」人は86%であるが、30代の95%に対し、60代は78%であった。

I その他

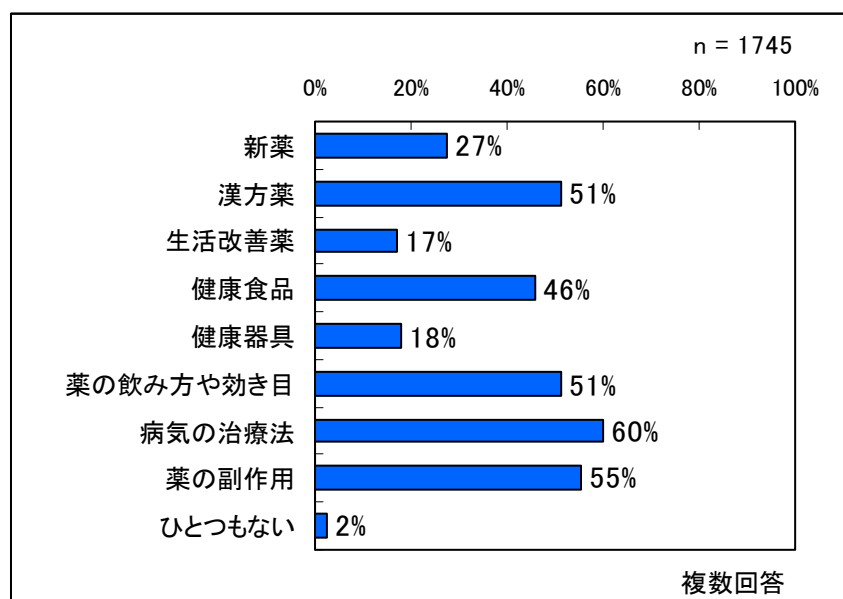
1. 用語の認知度：「かかりつけ医」「かかりつけ薬局」「インフォームドコンセント」「医薬分業」「院外処方」が高かった
2. 健康情報：「病気の治療法」「副作用」「漢方薬」「健康食品」「飲み方・効き目」に関心が高かった
3. 新薬の開発：難病の治療薬の開発が圧倒的

1. 次の言葉の中で、あなたが聞いたことのあるものいくつかをつけて下さい。



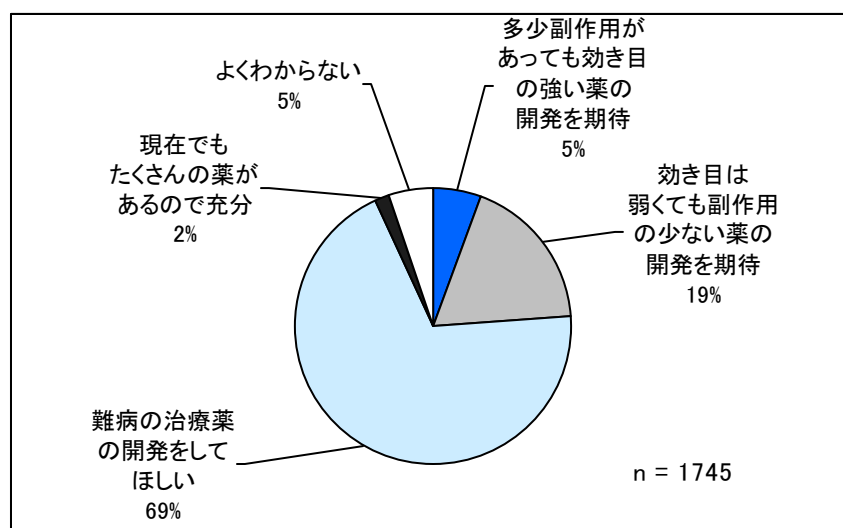
医療や医薬品に関する言葉で認知度が高かったのは「かかりつけ医院」(93%)、「院外処方」(70%)、「かかりつけ薬局」(69%)、「医薬分業」(68%)、「インフォームドコンセント」(62%)であった。

2. 次の健康情報の中で、あなたの関心の強いものは何ですか。(はいいくつでも)



関心の強い健康情報としては「病気の治療法」(60%)、「薬の副作用」(55%)、「薬の飲み方や効き目」(51%)、「漢方薬」(51%)であった。

3. 新薬の開発について、あなたのお考えに最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。



「難病の治療薬の開発をしてほしい」が69%と最も多かった。ただ60代の女性では「効き目は弱くても副作用の少ない薬の開発を期待する」が32%と比較的多い(全体では19%)。

医師と一般市民の意識の対比

「医師と一般市民の意識」の対比について

医療提供者である医師と医療消費者である一般市民に対して、それぞれ類似した質問を行った結果の集計・分析を対比したものを次頁以降にまとめて掲載した。

医師向け調査 8 項目（A～H）の中で、A 医薬品に関する情報、B 医薬品の情報提供、C 医薬品に関するコミュニケーション、D コンプライアンス、F 医薬分業、G 情報の開示、H その他の 7 項目（主問 31 問）中、11 問については医師、一般市民の両者を対比してみることができたので参考にさせていただきたい。

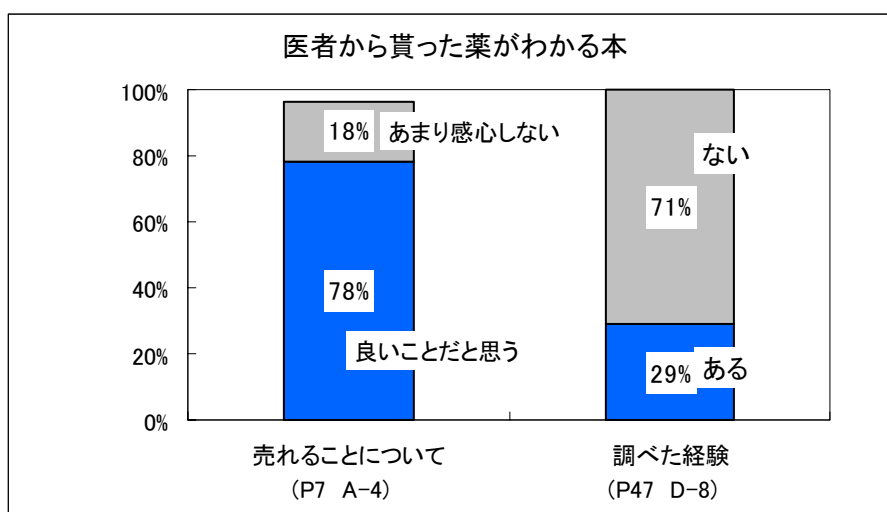
医師と一般市民の意識の対比

A 医薬品に関する情報

1. 医者から貰った薬がわかる本

「医者から貰った薬がわかる本」について「良いことだと思う」と78%の医師が肯定している。

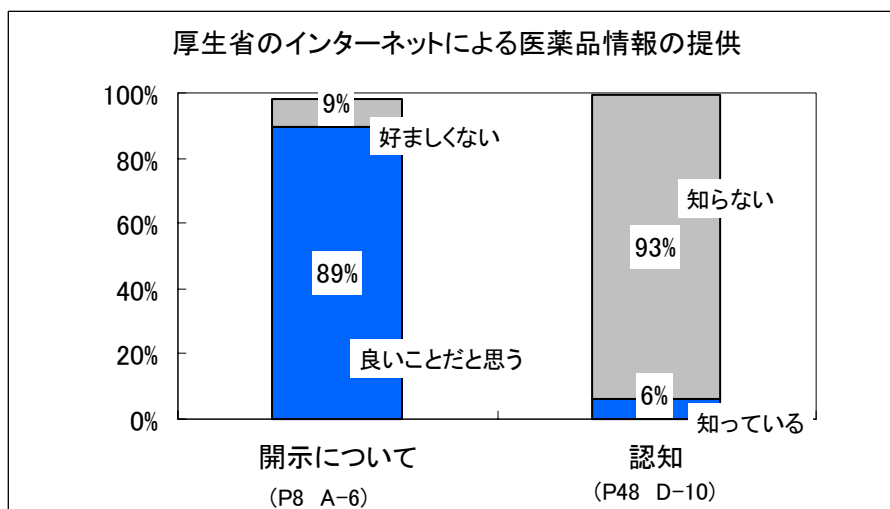
処方された薬について「医者から貰った薬がわかる本」などで調べたことのある一般市民は29%である。



2. 添付文書情報や副作用情報の開示

89%の医師が厚生省によるインターネットでの添付文書情報や副作用情報の開示を良いことと思っている。

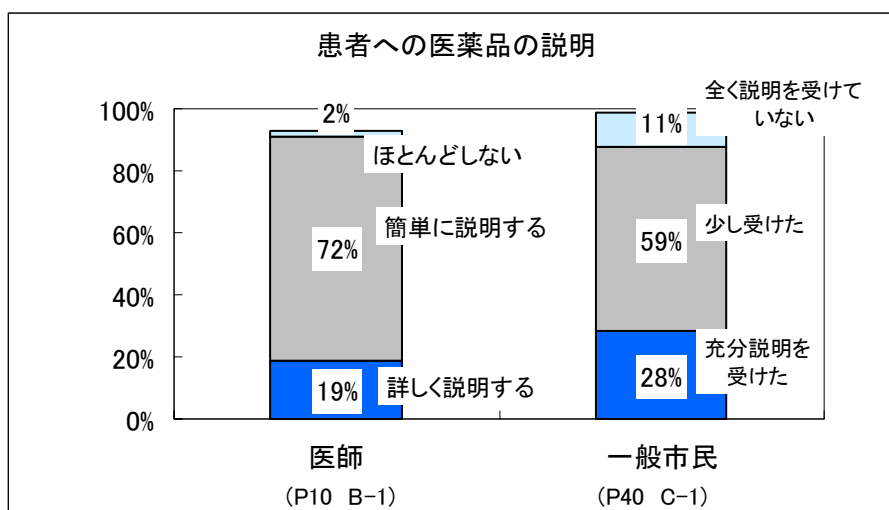
一方、一般市民の認知についてみると6%と低い。



B 医薬品の情報提供

1. 薬効や副作用などの患者への説明

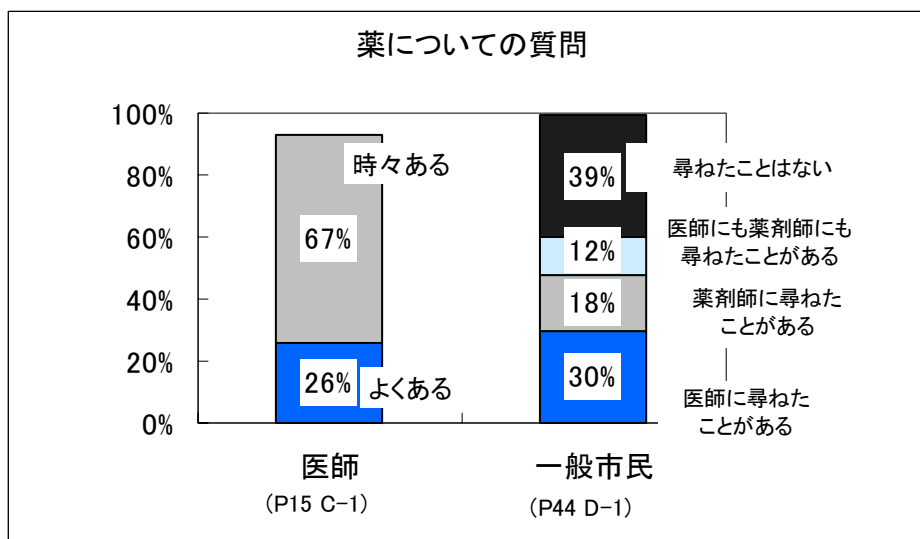
医薬品投与時の患者への薬効や副作用の説明については「詳しく説明する医師」が19%、「簡単に説明する」医師が72%であり、合わせて91%の医師が何らかの説明をしている。一般市民では「十分説明を受けた」が28%、「少し受けた」が59%で87%の人が説明を受けたとしている。



C 医薬品に関するコミュニケーション

1. 患者からの医薬品についての質問

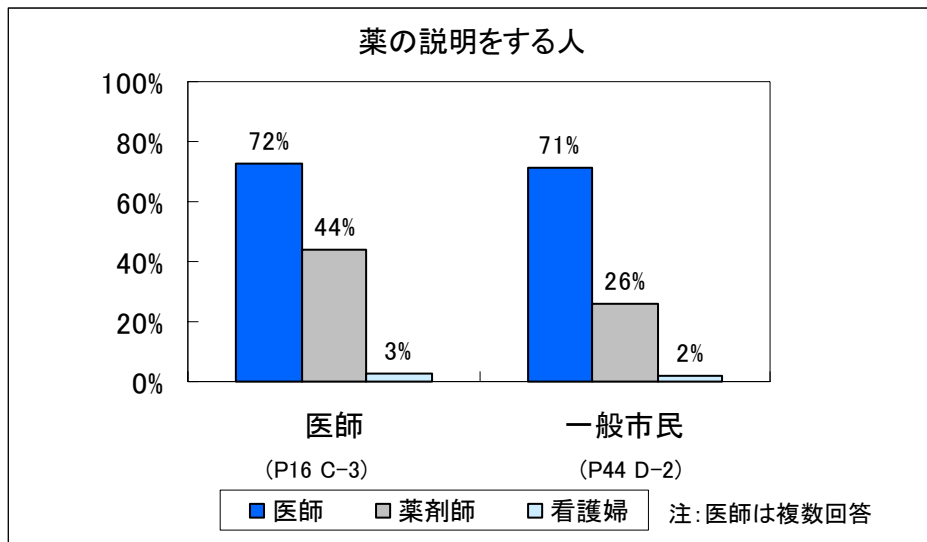
患者から医薬品について「よく尋ねられる」が26%、「時々尋ねられる」が67%であり、尋ねられている医師は93%である。一方、医師に尋ねたことのある患者は42%であった。



2. 医薬品について説明する人

医薬品について説明するのは医師がするのが望ましいとの回答が72%、薬剤師が44%であった。

一般市民では医師に説明して欲しい人が71%に上る。

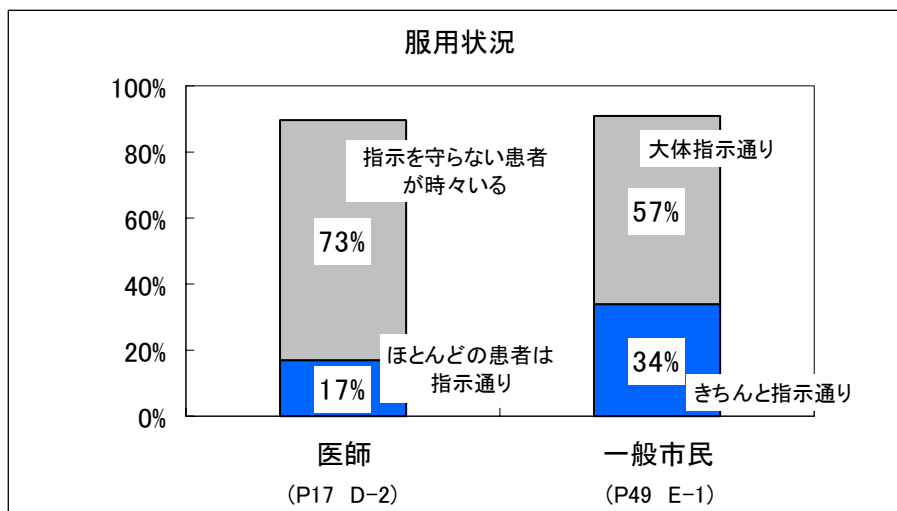


D コンプライアンス

1. 慢性疾患患者の服用状況

慢性疾患患者の服用状況について、医師の回答は「ほとんどの患者が指示どおりに服用している」17%、「指示を守らない患者が時々いる」73%である。

一般市民では「きちんと指示どおりに飲む」34%、「大体指示どおりに飲む」57%である。

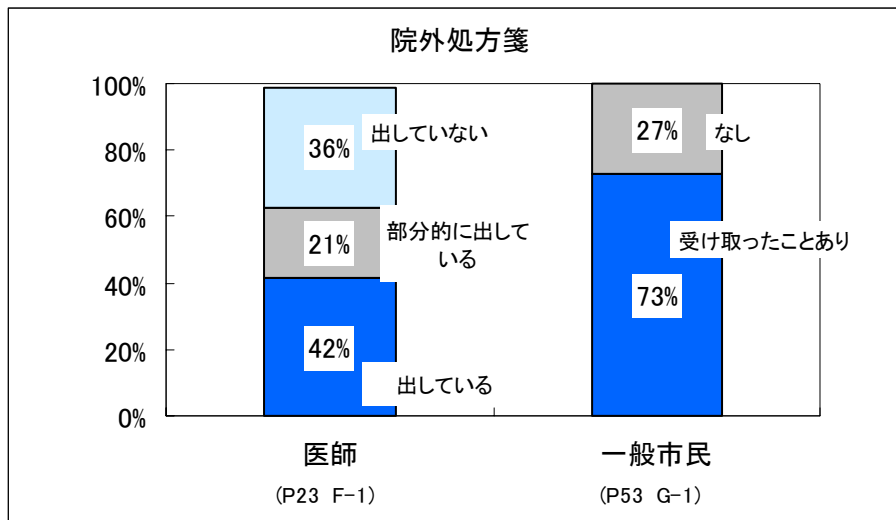


F 医薬分業

1. 院外処方箋の実施状況

院外処方を「出している」との回答は42%、「部分的に出している」が21%で63%の医師が医薬分業に対応している。

一般市民では73%が院外処方箋を受け取った経験がある。

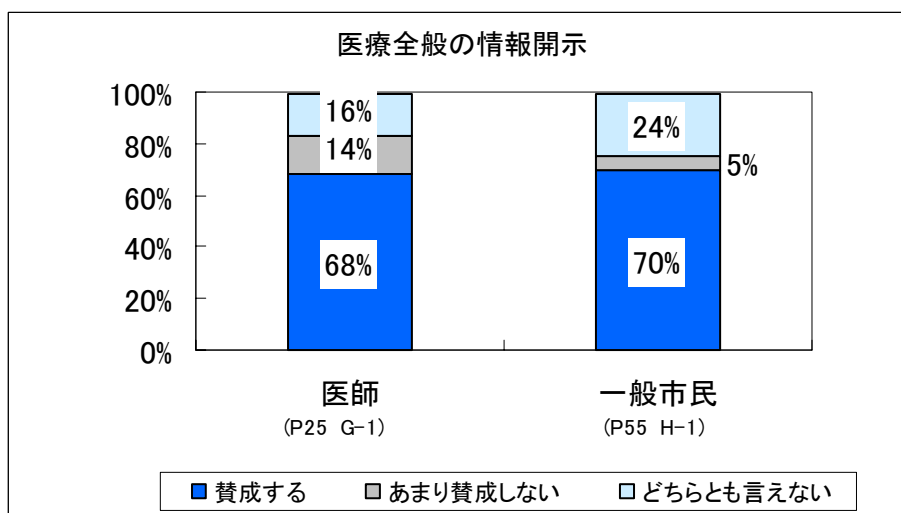


G 情報の開示

1. 医療全般に関する情報開示

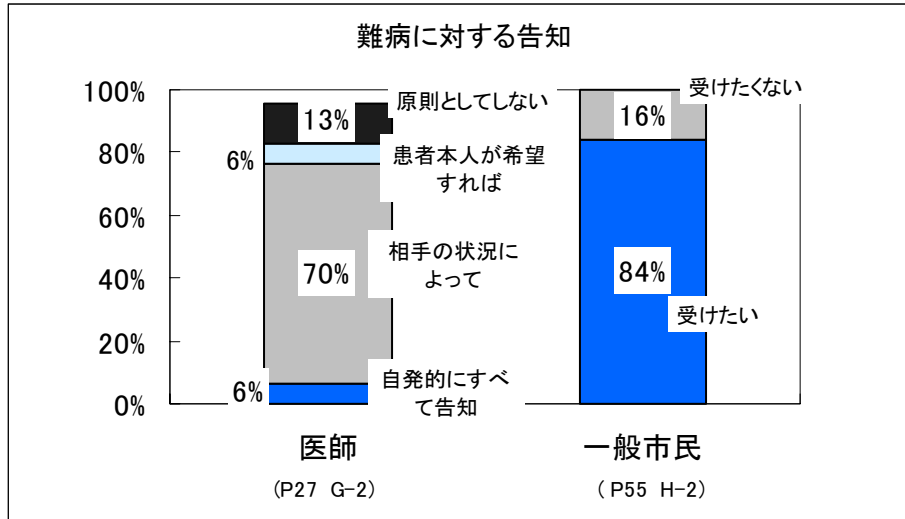
医療全般に対する情報開示を「賛成」とする医師が68%、「あまり賛成しない」医師が14%であった。賛成する理由としては「患者は治療に関して知る権利がある」との回答が72%、「積極的に治療に参加することができる」が56%であった。

一般市民では賛成との回答が70%に上る。その理由については「自分の病気について知る権利があるから」が85%であった。



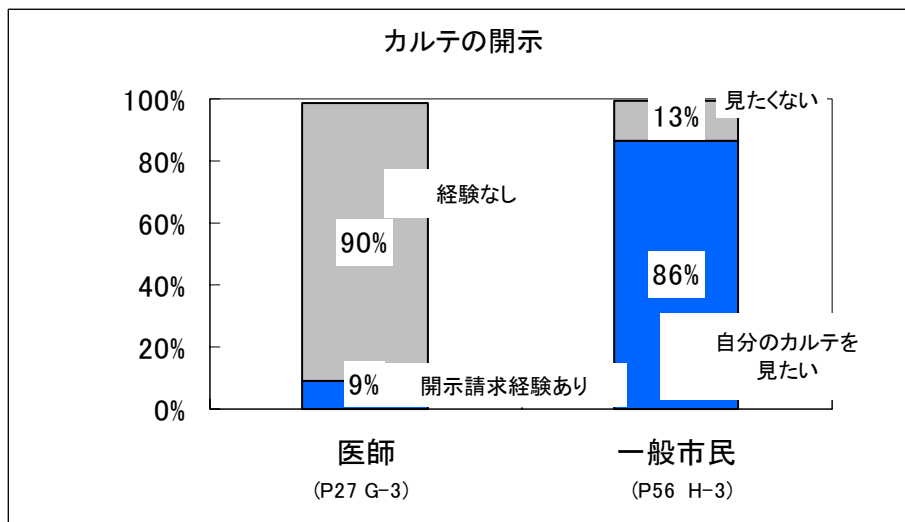
2. 難病の告知

告知について、医師では「相手の状況によって告知している」との回答が70%であった。一般市民では告知を望む回答が84%に上った。



3. カルテ開示請求

カルテ開示請求を受けたことがある医師は9%である。一般市民では86%が自分のカルテを見たいと思っている。

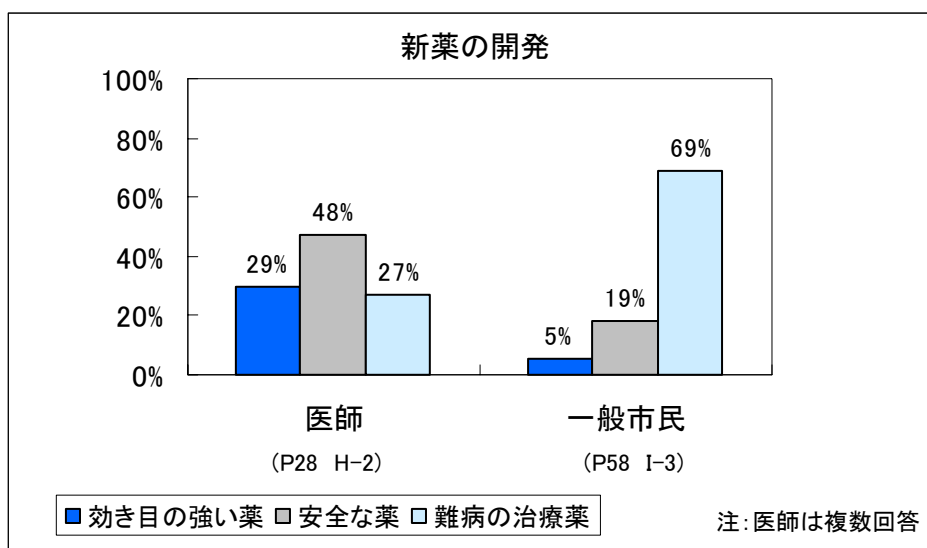


H その他

1. 新薬開発

医師では「効能・効果よりも安全性を重視した医薬品」の開発を期待するとの回答が48%、「多少副作用があっても効能・効果が高い医薬品」が29%、「難病、稀少疾病の治療薬」が27%であった。

一般市民では「難病の治療薬の開発をしてほしい」が69%と多い。



医師・一般市民の
医薬品および医療に関する意識調査
概要

平成 12 年 3 月

発行：日本RAD - AR協議会
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 4-2
第 23 中央ビル 5 F
TEL：03-3663-8891
FAX：03-3663-8895
E-mail：info@rad-ar.or.jp